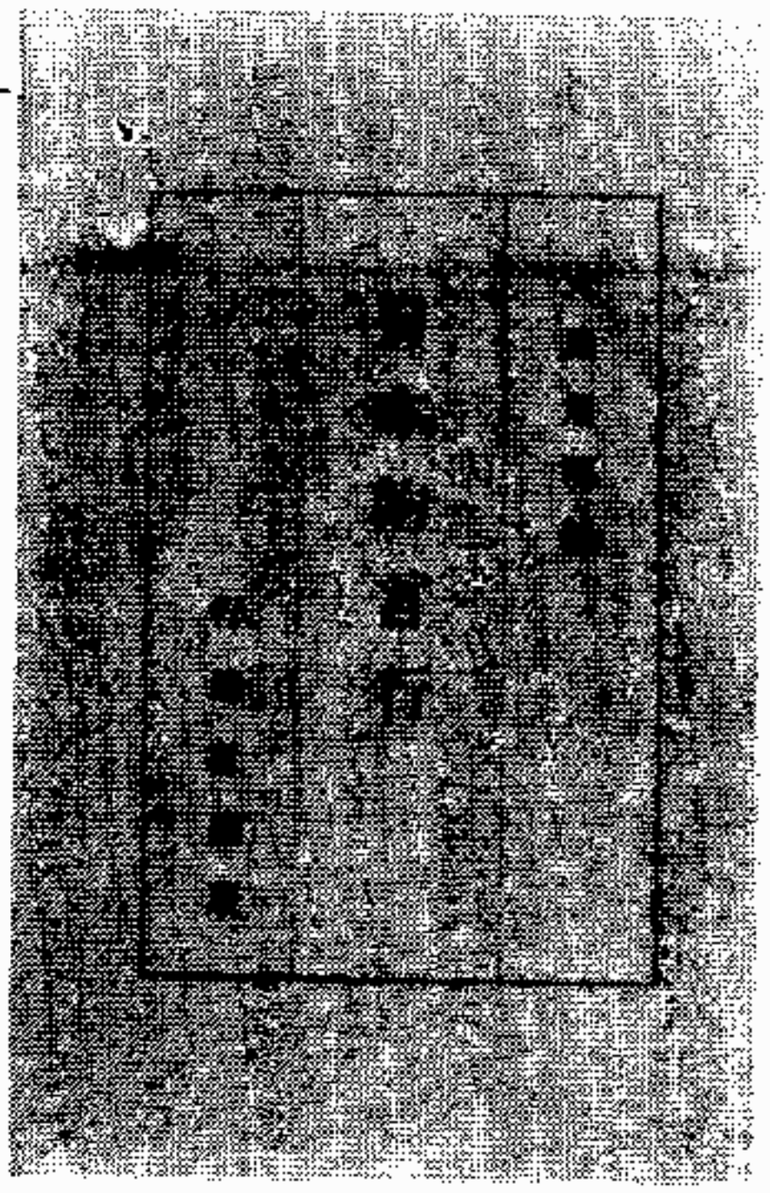
日本的言行



〔解説〕一、本書は、昭和五年（一九三〇）一月の刊行である。

大正末期より昭和の初頭にかけて激成された左翼運動に対して、大川博士がその抱懐する日本的改造の原理を各地において講演されたるものを収録したものである。

一、「たとひ劣機にてあれ、自己の本然を尽すは巧みに他の本然に倣ふに優る。自己の本然に死するは善い、他の本然に倣ふは恐るべくある。」との信念に生きる大川博士は、国家の改造または革新においても、「吾等は他国の善なるものを借り来りて此国の悪と戦はうとは思はない。吾等の善は、之を外に求めずして内に求めねばなりませぬ。吾等は日本的生命の衷に善なるものを把握し、之によって現前の悪を打倒しなければなりませぬ。それ故に吾等は先づ純乎たる日本精神に復帰し、吾等の魂の衷に純正日本を確立しなければなりませぬ。かくしてのみ真乎の改造が可能であります。此の精神によって、然る後に他国の長を採るは可い。本末主客の顚倒は許さるべくもない。」として、日本的自覚の確立・国民的自立を強調して国民の魂を覚醒せしめ、もって真個の日本を確立せんがために刊行されたものである。而して日本の改造は、レニンに倣わず、ガンディに倣わず、ケマルの跡を踏まず、日本精神の真個の体現者によって、日本的に断行せらるべきが興国運動の原理である、と主張しておる。

（昭和五年一月刊・四六版・一六二頁・行地社）

はしがき

茲に『日本的言行』と題して刊行する小冊は、過去数年に亘り、各地に於て試みたる幾回かの講演の要約である。予は本書の八篇のうちに含まれたる思想を、いろいろなる会合に於て、いろいろなる題目の下に講演した。講演終りて後に其の内容を想起しつゝ自ら筆執りて之を再現し、多くは之を吾等の機関たる月刊日本の誌上に発表した。いま之を一巻とするに当り、各篇に若干の雌黄を加へ、且つ出来得る限り思想の内面的順序に従つて之を配列し、題目の如きものである。曰く『人は第一に人間であらねばならぬ、人間たるの根本が立つて、初めて国民、国家主義・国民主義を奉ずる者に対して挑まるゝ議論は、常に下の如きものである。曰く『人は第一に人間であらねばならぬ、人間たるの根本が立つて、初めて国民たることも出来る。それ故に日本国又は日本人といふことに固執するのは、決して真個の人間となる所以でない』と。此の主張は、一見甚だ道理あるが如く見えて、実は抽象的断見に陥れるものである。試みに問ふ、いづれの処にか桜に非ず、梅に非ず、牡丹に非ざる『花』があるか。花は一個の理念としては存在する。而も此の理念は、必ずや桜・桃・梅・菊等の特殊の花として咲き出づることによって、初めて実在となるのである。それ故に梅花は、梅花として咲く以外に、決して花たることが出来ない。梅花によつて、花の理念が初めて実現せられ、花の花たる所以が発揮される。こは正しく人間の場合に於ても同然である。

拒むべくもなき事実として、一切の人間は必ず孰れかの国家又は民族の一員として生れて来る。日本人に非ず、米国人にも非ざる『人間』は実在としては決して存在しない。そは唯だ一個の理念として存在するだけ

であり、而して此の理念は必ず民族又は国民として実現される。故に日本人は日本人として、米国人は米国人としてそれ〴〵の面目を発揮することが、取りも直さず人間の面目を発揮することゝなる。従つて真個の国民となりてこそ初めて真個の人間となり得る道理である。此の順序を誤るのは抽象的論議より来る顛倒の見である。吾等日本国に生れたる者は、第一に日本人であらねばならぬ。本書の八篇は、実に、此の簡単明瞭なる論拠に立ち、如何にして真個の日本人たり得るかを考察せる予の努力の一端に外ならない。

昭和五年一月

第一　日本的言行

一　太宰春台と本居宣長

『日本には元来道といふこと無之候。近き頃神道を説く者、いかめしく我国の道とて高妙なるやうに申候へども皆後世に言ひ出したる虚談妄説にて候。日本に道といふこと無き証拠、仁義礼智孝悌の字に和訓なく候。凡そ日本に元来有る事には必ず和訓有之候。和訓なきは元来日本に此事無き故にて候。礼義といふこと無かりし故に、神代より人皇四十代のころまでは、親子兄弟叔姪夫婦になり給ひ候。その間に異国に通路して、中華の聖人の道此国に行はれて、天下の万事皆中華を学び候。それより此国の人礼儀を知り、人倫の道を覚悟して禽獣の行ひをなさず、今の世の賤き輩までも、礼儀に反く者を見て畜類の如く思ひ候は、聖人の教の及べるにて候、日本の今の世を見るに中華の昔に及ばずといへども、天下は全く聖人の道にて治まり候と存じ候。日本はまた殊に小さき道にて政を助くること能はず、畢竟諸子百家も仏道も、堯舜の道を戴かざれば世に立つこと能はず候』

此の驚くべき言葉は、太宰春台の著はせる『弁道書』の一節であります。異邦崇拝は今日の日本に於ても甚しくある。而もキリストを崇拝し、マルクスを崇拝し、レニンを崇拝する当今の日本人と雖ども、恐らく太宰春台が徹底して堯舜を崇拝せるには比ぶべくもないと思はれます。ひとり春台のみならず、徳川時代の儒者は若干の例外を除けば、概ね春台と五十歩百歩の支那崇拝者であつたのであります。

是くの如き時に当り、賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤等の国学者が、一代の中華心酔に宣戦して、日本思想の闡明

日本精神の確立に心砕けることは、吾等をして雄風を今日に仰がしめるものであります。わけても深く国民の魂に巣くひつゝある今の世に、日本主義を奉じて屹立せんほどの者は、常に感激の泉を此等先賢の精神に汲むことを忘れてはなりませぬ。

本居宣長は、当時の儒者が支邦の経史詩文を学びつゝ、却つて皇国のことに無知なるを指摘して下の如く言つて居ります――『儒者に皇国の事を問ふに知らずと言ふをばいたく恥と思ひて、知らぬ事をも知り顔に言ひ紛らす。そは万を漢めかさんとする余りに其身をも漢人めかして、皇国をばよその国の如くもてなさんとするなるべし。されどなほ漢人にはあらで御国人なるに、儒者とあらん者の己が国の事知らであるべき業かは。ただし皇国の人に向ひては、さあらんも漢人めきてよかんめれど、もし漢国人の問ひたらんに、われはそなたの国の事は能く知れども吾国の事は知らずとは、さすがに得云ひたらじをや。もしさ云ひたらんには、己が国の事をだに得知らぬ儒者の、いかでか人の国の事をば知るべきとて、手を拍ていたく笑ひつべし。』

此の警告は移して直ちに今日の欧米心酔者に加へらるべきものであります。徳川時代に学問と言へば漢学のことなりし如く、今日に於ては横文字のみが真理の庫を開く鍵なるかの如く考へる者が居る。欧米の事とさへ言へば、巴里の横町の小料理屋の話までが、誇るべき知識とされて居る。而して神武紀元何年なるかを知らなくとも、些かの恥ともされて居ない。西洋の社会史は研究されるけれど、日本社会史の研究は少数専門家の手に委ねて顧みようともしない。社会の進化乃至改造を論ずる者も、西洋の社会と日本の社会との異同をさへ明かにせんとせず、直ちに西欧学者の唱ふる原理を日本にも適用せんとする。マルクスの思想を真理なりとして、之を立証するために引用し来るものは総て西洋の歴史であります。試みに『マルクスの原則に立つて日本史を説明せよ』と設問すれば、日本の歴史は之を知らずと答へて平然たる為態であります。外交上の論議に於ても、例へば米国の邦人移民排斥を論ずるに当り、ひた

すら同胞の米国に於ける行動の非を挙げて、米国の立法のやむを得ざるを弁護する学者が少なくありませぬ。まことに『皇国をばよその国の如くもてなさんとする』者であります。吾等は断乎として此の主客顛倒を改めねばなりませぬ。而して総て日本的に思ひ且行はねばならぬと存じます。

二　道そのものと道の説明

太宰春台が日本に元来道なしと主張したのは、事実と説明とを混同せるものであります。此点に関しては、平田篤胤が其著『入学問答』の劈頭に説くところ、実に其妄を論断して適切無比であります。彼は下の如く言ふ――『一体真の道と申すものは、実事の上に備はりあるものにて候を、世の学者はとかく教訓の書ならでは道は得られぬことのやうに心得居り候へども、甚だの誤りに候。その故は実事があれば教は起り候なり。されば教訓と申すものは実事よりは甚だ卑きものに御座候。老子の書にも大道廃れて仁義ありと申候は、こゝをよく見ぬき候語に候』

まことに篤胤の言の如く、春台が日本に道なかりしとせるは、道の説明なかりしを道そのものが無かりしと速断せるものに外ならぬ。吾等の祖先は常に自ら『言挙げ』せぬことを誇りとし、徒らに議論多き支那人を『言さへぐ唐国人』として蔑しんで居たのであります。かゝる祖先が、道徳に関する論議後世に遺さゞりしを見て、直ちに道徳的意識なかりしかの如く考ふるは、驚くべき断見と言はねばなりませぬ。吾等の祖先が如何なる生活をして居たかを知るためには、祖先の言論に非ず其の行動を見ねばならぬのであります。

而して吾等の祖先の行動は、些かも包み隠すところなく、古事記・日本書紀、乃至万葉集等の古典に書き残されて居ります。吾等は此等の古典を通じて、吾等の祖先の生活が、曾に春台の言の如き非道徳のものならざりしのみなら

ず、実に雄渾荘厳なりしことを認めざるを得ませぬ。吾等の祖先は、自ら『天の益人』と称へて、崇高なる自尊の念を抱いて居たのであります。天の益人とは、天意を奉じて弥栄え行く民の意味であります。天は即ち神であります。神は即ち至高の理想であります。かくて天皇は即ち皇祖皇宗の延長に亘らせられる。故に天意を奉ずるといふことは、天皇の大御心を奉ずることに他ならないのであります。かくて天皇の大御心を奉ずる日本国民が、一人でも多くなれば夫れだけ至高の理想が地上に実現されて往くといふのが、実に吾等の祖先の自覚であり自信であつた。之を今日の吾が同胞が欧米の人口論に魂を奪はれ、人口過剰などと唱へて日本民族の繁殖を却つて持余して居るのに比ぶれば、その意気の差は天地雲泥の如きものありと言はねばなりませぬ。吾等の先祖は晴れたる空の如き朗かなる心を以て生活し、常に『清き明き心』を有たんとし、常に『天晴れ』の気持を失ふまいと努めて居ました。これは公明にして雄大なる理想を奉ずる者のみが能くすることであります。

彼等の祖先は、是くの如き理想と自信とを以て日本国の建設と経営とに従つたのであります。而して此の態度と精神とは、戦争の場合に於て最も顕著に現はれて居ります。彼等の戦争は実に『まつろはぬ』ものを『まつろはす』ために他ならなかつた。まつろふとは祭り合ふこと、即ち同一の神を尊崇すること、従つて同一理想を奉ずることであります。彼等が其の誇りとせる細戈（くわしほこ）――精鋭なる武器を執つて起つたのは、実に同一理想を奉ぜざるものをして、彼等の理想を奉ぜしむるためであつたのであります。それ故に如何なる敵といへども、一度びまつろひさへすれば、悉く吾が同胞となり、相携えて至高の理想を実現するために精進することができたのであります。かくてこそ吾等の祖先は、天壌と共に弥栄え行く国家を建設し得たのだ。是くの如き国家を建設せる其事が、何よりも雄弁に祖先の荘厳なる生活を物語るものであります。そは『道といふこと無かりし』民

の決して能くするところではありませぬ。さらば吾等をして再び本居宜長の言を引かしめよ——

『皇国の古は、さることなく、天が下は穏かに治まりて、天つ日嗣いや遠永に伝はり来ませり。されば吾等をしてたき教も何も無かりしかど、下が下まで乱るゝことなく、実は道ある故に道てふ言はゞ、これぞ上も無き優れたる大道にて、異国の名に習ひて言はなくなり。そを事々しく言ひ挙ぐると然らぬとのけぢめを思へ。言挙げせずとは、異国の如くこちたく言ひ立つることなきを云ふなり。譬へば才も何も優れたる人は言ひ立てぬを、なまくのわろ者ぞ、反りていさゝかの事をも事々しく言ひ挙げつゝ誇るめる如く、漢国などは道乏しきが故に、かへりて道々しきことをのみ言ひ合へるなり』

三　聖人の教と祖先の遺風

東西の歴史が明瞭に示す如く、一教一派の祖師は常に混沌乱離の世に出現して居ります。老子が道破せる如く、道なきところに却つて道々しき言挙げが行はれるのであります。孔子も釈尊も基督も、皆な乱世か亡国か、然らずば衰世に生れて居ります。それ故に彼等は道なき世に生れ、人々が道を行はざりし時に、之を正しき道に復帰せしめんと努めた偉人であります。それ故に彼等は、謂はゞ魂の医者であります。其教は病める魂の薬であるが故に決して糧食ではない。基督は、右の頬を打たれたら左の頬をも出せと言ひ、上衣を取られたら下衣をも与へよと教へて居ります。そは当時の猶太人が、それほど激越に戒しめなければならなかつたのは、当時の印度人が性欲的に激しく放肆であつたからであります。孔子の教は両者に比べて遥かに穏当ではあるけれど、尚且礼儀三千威儀三百と説

いて居ります。それは春秋戦国の乱離に亡び去らんとせる周代文化を、如何にもして護持せんと苦心せるが故に外なりませぬ。かくて比等の教は、吾等の精神のための薬であり、吾等の精神の病は之によつて癒やさるゝが故に、固より謝恩の心を抱いて之に対さねばなりませぬ。さり乍ら吾等は、之を以て日々の糧と思ひ違へてはならぬ。此等の教訓は決して一々守らるべきものでない。若し強いて守らうとすれば、現実の生活との間に矛盾杆格を来たし、必然に無理を生じて偽善に陥ります。吾等は眼前幾多の例証を、牧師や僧侶の生活に於て見て居ります。

されば吾等の生命の糧は、決して聖人の教に非ず、実に祖先の遺風であります。祖先の遺風を守ることが、取りも直さず健全なる日本国民の生活であります。吾等の古典は、教を説かずして遺風を伝へて居る点に於て、吾等の生命の糧として無比の宝であります。孔子が一巻の教訓書をも遺さず、唯だ春秋を著はせることを思へば、孔子の本旨もまた恐らく祖先の遺風を伝へんとするに在つたのであろうと思ひます。さればこそ『わが志春秋に在り』と言ひ、また『我を知る者はそれたゞ春秋か、我を罪する者はそれたゞ春秋か』と言つて居るのであります。然るに支那に於ては、孔子の此の真意が充分に会得せられず、却つて其の『教訓』のみが持囓されて来たのであります。

四　日本的自覚の確立

吾等は決して異邦思想乃至文明の摂取を拒むものでありませぬ。善に拒まざるのみならず、声を高くして之を主張するものであります。唯だ吾等の極力戦はんとするところは、魂を異邦精神に売ること、換言すれば本末主客を顛倒し去ることであります。日本歴史が最も力強く教ゆる如く、国民的自覚が強烈であり、日本精神が堅確に把持されて居さへすれば、外来一切の思想文明が、常に国民的生活の向上充実に寄与し来れるのみならず、其等の異邦文明並に思想は、吾等の精神に統一せらるゝことによつて真個の意義と価値とを附与されて来たのであります。之に反して国

民的自覚鈍り、日本精神の動揺を見る時は、曾て国民に貢献せし同一外来思想並に文明が、常に却つて災厄の因となつて居ります。故に禍福は彼にあらずして吾に在る。例へば現代日本の政治と軍事とを比較するが宜しい。共に同一日本国民が、等しく欧米の制度に倣つてやつた仕事ではないか。然るに一方吾が陸海軍は世界に誇るべき成績を挙げて居るのに、他方吾国の政治は言語道断の不始末でありまず。吾等は此の相違の由来するところを切実深刻に反省せねばなりませぬ。これには大小幾多の原因が重畳して居るであらう。而も其の最も根本的なるは、実に日本精神を把持すると否とに在ります。今や日本は其の独自の精神に復帰して、一切を純乎たる日本的立脚地から批判せねばならぬ時となつた。経済上の組織も、政治上の制度も、社会的の施設も、悉く行詰つた。之を打開して新路を開拓するためには、異邦的に考へ且行ふことを許しませぬ。実に純乎として純なる日本的思索と日本的行動とに俟たねばならぬと信じます。

第二　洋意の出離

一　『洋意を去れ』

『漢心（からごころ）とは、漢国のふりを好み、かの国を貴ぶのみをいふにあらず、大方世の人の万の事の是非善悪を論ひ、物の理（ことわり）を言ふ類、すべてみな漢籍（からふみ）の趣きなるいひなり。さるは漢籍を読まぬ人は、さる心にはあるまじきわざなれども、何わざも漢籍を善しとして、彼を学ぶ世の習ひ千年にも余りぬれば、おのずからその意（こゝろ）世に行き渡りて、人の心の底に染みつきて、常の地（ち）となれる故に、我は漢意もたずと思ひ、これは漢意にあらず当然の理なりと思ふことも、なほ漢意を離れ難き習ひぞかし。そもそも人の心は皇国（みくに）も外国も異なることなく是非善悪に二つなければ、別に漢意といふこと有るべくもあらずと思ふは、一わたり然る事のやうなれども、しか思ふも漢意なれば、此の意（こゝろ）は除（のぞ）こり難きものになんありける。人の心の何れの国も異なること無きは、本の真心にこそあれ、漢籍にいへる趣きは、みな彼の国のこちたきさかしら心もて、偽り飾りたる事のみ多ければ、真心にあらず、非とすること実（まこと）の是にあらず、彼が是とすること実の是にあらず、非とすること実の非にあらざる類も多かれば、是非善悪に二つ無しともいふべからず。また当然の理と思ひ取りたる意も、漢意の当然の理にこそあれ、実の当然の理にはあらざること多し。大方これらの事、古き書の趣きを能く得て、漢意といふものを取り去りぬれば、おのずからいとよく分ることを、おしなべて世の人の心の地、皆漢意なるが故にそれを離れて悟ることのいと難きぞかし』

この本居宣長の言葉は、徳川時代の止度なき支那崇拝に対する痛烈なる警告であります。徳から熱心に儒教を奨励しました。そのために徳川時代に於ては、学者といへば漢学者、学問といへほど、儒者が盛んになつたのであります。儒教が盛んになれば孔孟が崇拝されるのは言ふまでもないひて総じて支那のものを尚ぶ傾向を生むのもまた止むなき径路であります。かくて徳川時代の儒者のを中夏と尊崇し、吾国を東夷と卑下するものさへ少なくなかつた。太宰春台の如きは、孔孟の教が伝へられるまで、日本人は禽獣の如き無道徳の生活を営んで居たとさへ極言したのであります。

かくの如き時代に於て本居宣長が、漢意を去れと高唱したことは、非常なる卓見といはねばなりませぬ。漢意を去れとは、取りも直さず日本精神に復れといふことであります。宣長以前に於ても国学者荷田春海は

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の
跡を見るのみ人の道かは

と詠じて、荻生徂徠一派の支那崇拝を排撃し、加茂真淵もまた太宰春台の妄論に憤激し、名高き『国意考』を著はして日本古道の荘厳を力説し、中華至上主義を論難しました。而も此の古学運動の機運を受けて、之を集大成したのが実に本居宣長であり、此の思想を抱いて街頭に善戦し、日本精神の確立に心を砕いたのが平田篤胤であります。此等の偉人の輩出によつて、これまでは学問と言へば漢学を意味して居たのが、皇国本来の思想文学を研究する学問が、和学又は国学の名に於て、初めて漢学と拮抗するやうになつたのであります。

さて今日の吾国には、最早徳川時代の如き支那崇拝が影を潜めてしまつた。雷に影を潜めたるのみならず、支那の善なるものさへも無視して、之を侮蔑する傾向になつて来ました。今日の日本は支那を去つて欧米についたのであります。而して当時の儒者に劣らぬ多くの欧米崇拝者が、吾国の思想界に時めいて居ります。吾等は本居宣長が、徳川

時代の思想界に向つて『漢意を去れ』と警告せる如く、現代日本の思想界に向つて『洋意を去れ』と警告せんと欲するものであります。今日の日本人は、宣長の言葉そのままに、西洋を貴ぶのみならず、総じて西洋的に思索し処断せんとして居ります。欧米の書籍を読まぬ人すら、かくの如き雰囲気の中に在るが故に、知らず識らず西洋的に思ひ且行はんとして居ります。まことに『おしなべて世の人の心の地、みな洋意なるが故に』之を離るゝことは至難のわざとなつたのであります。

二　明治日本の欧化主義

日本の欧米崇拝は、明治維新このかたのことであります。もと明治維新は儒教の大義名分の思想と、国学によつて闡明せられたる国体観念の把握とが、思想的根拠となつて行はれたる改革なりしとは言へ、愈々幕府を倒して天皇を中心とする政治を行はんとするに当りては、今更支那の制度に倣ふべくもなく、さりとて上代日本の制度を其儘に復活すべくもない。それ故に明治維新の指導者が、今や新たに交りを結んで強大恐るべきを知れる欧米諸国を模範とし、制度文物みな之に則らんとせることは、固より当然の径路でありました。彼等は日本を富強ならしむるために は、西洋文明を取り入れる外に別途なしと考へたので、徹底せる日本の近代化、又は日本の西洋化に着手したのであります。

そは実に驚くべき急激なる変化であつたと言はねばなりませぬ。維新以前僅に十五年、ペリーの黒船が初めて浦賀に来りし頃まで、国民は西洋人を野蛮視して居た。当時の錦絵や草双紙には、犬の如く片脚あげて放尿せる西洋人の姿を描いて居たほどであります。その西洋人が暴力を以て開国を強要せる故を以て攘夷運動が激成せられ、開国を迫られて承認せるを許すべからずとしての倒幕の気勢揚がり、遂に皇政復古の世となつたのであります。然るに今や昨

日まで攘夷倒幕に無我無中なりし志士が、君子豹変して欧米文明の随喜者となり、日本の欧米化に死力を傾倒し初めた。わけても当時欧米を巡歴せる人々は、その事々物々に魂魄驚駭して、日本は果して彼等と伍して独立を保ち得べきか否かをさへ憂ふるやうになりました。木戸孝允の如き、欧米を一巡して特に此憂を深くし、帰来極度の神経衰弱に陥つたと伝へられて居ります。福沢諭吉の如きも、また日本の独立を危ぶめる一人でありました。

日本は米国の強要によつて開国したのであるが、当時の日本は国力弱かりしために、極めて不利なる条約を欧米各国と結ばざるを得なかつたのであります。この不利なる条約を改正して、欧米諸国と対等の交際をなすためにも、日本を欧米諸国の如き『文明開化』の国たらしめねばならぬといふことが、明治政治家の切なる念願でありました。而して文明開化の民となるためには、政治法律はいふまでもなく、産業の組織、教育の制度、みな悉く欧米に倣はねばならぬと考へました。明治初年に日本の教育行政を担当せる森有礼の如き、日本語は文章としては意味曖昧、口語としては演説に適せずとの故を以て、之を廃して英語に替へるがよいと考へて居た。実に日本の言語までが、当時の政治家によつて斥けられんとしたのであります。

事情かくの如くなるが故に、明治初年の吾国の教育方針は、国民を西洋人に造り変へることを主眼としたと言ふを妨げませぬ。現に文部省が最初に全国に造りしものは英学校であり、英学校が後に師範学校となつたのであります。予は昭和二年夏、岩手県に赴きました時、盛岡師範学校最初の校長の教育方針を、当時学生たりし土地の故老に聞くことを得ました。此の故老の語るところによれば、校長は西洋の学問をするためには衣食住をも洋風にしなければならぬとして、五十前後の初老の婦人教師にまで洋服を強ひ、生徒には洋食を食はせたとのことであつたが、こは当時の教育方針を物語る絶好の一例であります。森有礼は是くの如き教育によつて教師を養成し、全国に小学校を立てゝ、国民

に無教育者なからしめんと努力したのであります。

当時の国民の知識状態を顧れば、政府が焦慮したのも無理なかつたと思はれます。義務を教へれば、血税とは文字通り血を絞ることゝ考へて一揆を起こした。田畑に電柱を立てると、罪を電柱に帰して之を抜き棄てた。初めて戸籍調べを大阪で行つた時は、人の人種を植えつけるためだとして、十二三歳の少女にまで御歯ぐろを着けさせた。小学校を立てると、それよりは真宗の説教所がよいと言つて今日の支那の田舎に見る知識程度であります。当局が焦慮したことに何の不思議もない。かくして一日も早く同胞を文明開化の民たらしむべく、しきりに各地に学校を立てたのであります。

一体学校は、教師ありて然る後に校舎あるべきものであります。然るに吾国に於ては、此の順序を顛倒するのを常として居ります。今日でさへ学校の新設に際して、第一に考慮されるものは金であり、最後に考慮されるのが教師であります。それ故に真に良い教師を得るのに困難して居るが、明治初年に於ては尚更のことであります。学校は立てたものゝ教師は容易に得らるべくもない。出来得るならば同胞を西洋人に育て上げる教師を、日本の津々浦々に配りたいのが当局の希望であつたらうが、これは当時に於て到底不可能のことであつた。かくて止むなく旧藩の学校の先生、学問ある士族、乃至は寺の住持や村学究などを、校長なり教師なりに採用して当面の急に応じたのであります。

こは政府としては不本意であつたとしても、日本のためには真に幸福なことであつた。若し政府の希望せる資格を具へし教師が、全国に於て一斉に同胞を西洋人たらしむべく教育したとすれば、今日の日本人は如何なるものになつて居たか。幸にも此等の村学究先生は、政府当局とは事変り、毫も西洋を尚び又は恐れることがない。彼等は紅毛碧眼の徒を眼中に置くことなく、専ら漢学又は国学を以て鍛えし旧き思想を少年に鼓吹し、日本は神国であり、文明国は

支那のみなるかの如き思想を、純真なる少年の頭脳に刻み込んでくれた。これは日本に取りて思ひ儲けぬ幸福であつたと言はねばなりませぬ。中央政府が飽迄も日本を第二の欧米たらしめる方針を以て進み、国民生活の一切の方面を欧米化せんと努めたるに拘らず、国民が能く日本的自尊と自覚とを維持し得たのは、外面的には日清日露の両役によつて強烈なる国民意識を喚起されたのであるが、内面的には此等の老先生に負ふところ最も大であります。

三　知識階級の欧米崇拝

日本は明治政府の努力により、とにもかくにも欧羅巴が其の実現のために三世紀を要せる文明を僅々半世紀の間に習得しました。それは或は皮相を学び得て骨肉に達しないとも言へるでありましせう。さり乍らかくて先づ日清戦争に勝ちて世界三大強国の一となり、次で日露戦争に僥倖して世界三大強国と対等の地位を占つまでに欧米文明を採用し得たことだけは事実であります。かくて国際的躍進は、主として西洋文明の摂取によると考へ来れば、国民の間に欧米崇拝の念が高まるのをまた当然至極と言はねばなりませぬ。加ふるに明治初年には政府当局こそ崇拝の旗頭であつたとは言へ、国民は地方の老先生から日本的乃至東洋的精神を鼓吹されて居た。然るに今や大学又は師範学校に於て、西洋至上主義の教育を受けたる教師が次第に其数を増して来たのであります。此等の新しき教師が老先生に代つて国民を教育するに及び、西洋崇拝の傾向は全国的になつた。高き教育を受けた者ほど、欧米心酔の度が高くなつた。この新興知識階級は『欧米のものは皆善し』と思ふやうになつて来たのであります。

これを私自身の経験に顧みましても、私の中学時代に於て国語漢文の教師は、常に英語教師よりも重んぜられなかつた。高等学校時代に於ても、英独語学の時間が殆ど自余一切の時間に比して法外に多かつた。高

の課目の時間と匹敵するほどであつた。英独の最も通俗低級の雑誌を読んでさへ、恰も同窓に誇り得る有様であつたのであります。当時私は主として哲学宗教に関する書籍を貪り読んで居たのでありますが、其頃の哲学者思想家と言はれし諸先輩は、概ね力を欧米思想の紹介祖述に傾け、日本思想に関する学術的論文の如きは、絶えて無くして稀に在るに過ぎなかつたのであります。其等の学者の総てを包む雰囲気は、恰も徳川時代の儒者が支那を尚びたると同じく、西欧殊に独乙哲学に対する崇拝の念であつたのであります。

私は今日尚は明瞭に記憶して居ります。井上哲次郎博士の著書に、徳川時代の儒者の思想を紹介せる三冊の本があります。博士は其本の中で、西洋哲学者の名には皆な『氏』を附けて、ソクラテス氏、スピノザ氏、カント氏、ヘーゲル氏などゝ呼び、日本の儒者は伊藤仁斎、山鹿素行、荻生徂徠と、総て呼捨てにして居ります。また日本の学者の思想を批判するのに、例へば徂徠の政治論はホツブス氏の思想に似て居る、それだから偉いといふ風に、すべて西洋思想が判断の標準となつて居ります。仁斎の理気一元論はパウルゼン氏の精力説に似て居る。それだから偉い。仁斎の理気一元論はパウルゼン氏の精力説に似て居る、それだから偉いといふ風に、すべて西洋思想が判断の標準となつて居ります。井上博士の名は、今日の青年に対してこそ何の権威もないが、私の青年時代には巽軒先生と言へば哲学界の第一人者として重んぜられて居たのであります。その学者の態度が既に是くの如しとすれば、吾々青年が真理は横文字の中にのみ潜めるかの如くに考へたことも、また無理ならぬ始末であります。

かような次第でありますから、私の学生時代には、東洋殊に日本思想を叙述せるものに真個学術的の名に値する書がなかつた。東洋哲学に関しては、村岡典嗣氏の『本居宣長』を唯一の除外例とし、其他は説明して核心に触れず、叙述して体系を成さず、唯だ西洋哲学に倣つて形式的に組織を立て古人の著書より抜抄せる章句を之に従つて羅列しただけのものであつた。井上博士の諸著の如き、当時に於て異類出色のものでありましたが、ついに此例に洩れなかつたのであります。私は哲学を学ぶ者の義務として、一応は諸書を渉猟しましたけれど、私の若き魂は殆ど何等

の感激をも之によつて与えられなかつたのであります。

加ふるに当時の吾国には、パーレーの万国史、又は十八史略に比すべき日本史がなかつた。そ
り論外でありますが、パーレーの万国史は小説を読む興味を以て之を読了させる魅力を有し、十
年をして血湧き肉躍らしめるに足るものがあります。然るに私は日本史に斯様な著作を探り得なかつた。竹越与三郎
氏の『二千五百年史』は希有の好著でありますけれど、青少年の誘物としては大部に過ぎて居ります。其他のものは
徒らに考証に追はれし専門家にのみ必要なる史書か、然らずば政治的事件の個条書に類し、唯だ地名人名年代の羅列
を以て若き記臆を苦めるる教科書的の国史のみでありました。この国民全般の好読物たるべき日本史なかりしことも多
くの青年をして日本其者に無関心たらしめた一因と存じます。かくて日本の知識階級は専ら欧米の思想文明を謳歌し
て来たのであります。

私は最近『国史回顧会』に於ける三上文学博士の講演筆記を読みまして、実に驚くべきことを更に知り得たのであ
ります。博士の講演によれば、明治十六年に大学予備門で一週一時間新井白石の読史余論を教科書に用ゐるまで高等
学校程度の学校に於て国史を教へなかつたということであり、而も此時に国史を教へるやうになつたのも、一独逸人
教師の忠告によれるものだといふことであります。博士の此の講演は、右の外にも明治初年の教育に関する大切なる
事柄を述べて居られますから、前節と重複の嫌ひもありますが、其の一部を特に下に引用させて載きます。

『然るに王政復古後の我国の政治は御承知の通り攘夷の時代から急転直下して外人崇拝時代となりました。これは攘
夷といふ事に裏面の意味のあつたにも由りますが、要するに既に国是を一変して世界の列国と交際し其文物制度を採
用することになつたからであります。即ち五箇条の御誓文の一に広く知識を世界に求めらるゝ意味のことが仰せられ
てあるのであります。ただ維新政府のなす所を見れば、余りに外国の文物制度を採用するに急にして、自国のものは

一概に因循なり固陋なりとして排斥し過ぎたのであります。我国古来の文化にも到底他国の追随し得べからざるほどの長所もあり美点もあることを忘れて之を排斥せんとした傾が多いのであります。私一個の経験に就て申すことは如何でありますが、私が小学校の生徒であつた時からこのかたさながら亜米利加の児童として明治政府から教育せられたものであります。小学校の初めに『イト』『イヌ』『イカリ』等の単語図を学び、続いて連語図を学んだのでありますが、其文句は『神は天地の主宰にして人は万物の霊長なり』『酒と煙草は衛生に害ありは其通りで少しも変なことはありませんが、其神と云ふのは『ゴツド』の直訳であつたと云ふことを後に承はつたのであります。それから修身書を学びましたが、其教科書は亜米利加のウエーランドの著したもの、翻訳書であつて無論基督教主義の徳育でありました。歴史を学べば小学校の初めから外国歴史であつて、日本歴史は教へては貰はなかつた。地理を学べばミツチエル氏世界地理書で日本に関することは一ページか二ページより書いてなかつたと思ひます。中学以上に於ては英語の教科書を多く用ひましたから一層外国の少年らしく教えられたのです。大学の予備門即ち後の高等学校に於て明治十六年に始めて一週に一時間新井白石の読史余論を教科書として国史を教へられましたが、これが高等学校程度の学校に於て国史を教へられた嚆矢であります。それを独逸語のお雇教師グロート氏が、予備門長杉浦重剛さんに向つて各国共此程度の学校にては其国の歴史を授くるものであるに、此学校にはそれがないのは甚だ不思議であると注意したので予備門長も成程と思はれ、そこで私共のクラスから国史を置かれたのであります。予備門長がかの国粋家の杉浦さんであつたからこそ早速グロート氏の忠告を容れられたのでありますが、若し滔々たる其当時の人々であつたならば、其の忠告も或は容易に受入れられなかつたであらうと思ひます。併し私共は他の一面から観れば、小学校より帰り途に漢学の先生の所に立寄つて国史略、日本外史、十八史略、大学、論語、等を教へられましたので、政府の手に由つては亜米利加児童らしく教育せられましたけれども

幸に私塾で謂はゞ補習教育によつて日本人らしい教育を受けたのであります。私塾に於ても右の如き補習の教育を受くること少く、私塾に於ても国史及び之に近い学科の教育を受くること頗る多いのであります。明治天皇も早くより教育上の此欠陥を御軫念あらせられまして、教育には本と末との区別のあるべきものであると然しながら自国のことを疎かにしては相成らぬ、教育には本と末との区別のあるべきものであるとの御趣旨のことを毎々仰せられたのであります。斯様な本末を転倒した教育を受けた国民が間違つた思想、間違つた感情を懐くやうになるは誠に已むを得ないことであります。今日朝野共に憂ふる所の思想問題の由つて来る所も、世界大戦後の人心の変動を初めとして原因はいろ〳〵ありますが、一つは斯様な頗る変つた教育を受けて、思想的伝染に罹り易い身体になつて居つたに由るとも思ひます』

四　現代改造論に潜む洋意

然るに世界戦は、これまで自他ともに唯一無上なるかの如く考へし欧米文明が、その幾多の欠陥を明らさまに暴露した。かくて西洋人自身が彼等の誇れる文明について反省し初めたのであります。彼等は自己の文明が果して正しき文明であるか、果して人間を社会的には幸福ならしめ、道徳的には健全ならしむる文明であるかに就いて、深刻なる疑問を抱くに至つた。世界戦後に公けにせられたる英独仏の学者の著書にして、近代欧羅巴文明の末路を説き、その欠陥を指摘せるものが、寡聞予の如き者の目を通せるだけでも六七種を数へます。就中シュペングラーの『西洋の没落』は、非常なる刺戟を思想界に与へた。ベンジャミン・キッドの『力の学』も、また近代欧羅巴文明の価値を否定し初めたために、日本の知識新しき進路を指示せるものであります。かくの如く欧米人自身が近代文明の価値を否定し初めたために、日本の知識階級の間にも漸く洋意を出離せんとする者の現はるゝに至りしは、当然でありながら喜ぶべき傾向とせねばなりませ

ぬ。而も現在に於ては、是くの如きは尚未だ一個の兆候たるに止まり、思想界の大勢は依然として欧米追従を事として居ります。

西洋崇拝が国民の『心の地』となり居る証拠は、先づ今日の改造論に現はれて居ります。社会改造の思想は、世界戦の最も重大なる所産の一つであり、苟くも文化の花咲くところ、総じて改造運動を見ざるなきに至つた。そは旧きものが旧きままに存続し得ざる時代に到達したるものなるが故に、改造運動の起るは当然至極と言はねばなりませぬ。日本もまた一切の方面に於て改造を必要とします。従つて改造論が唱へられ、改造運動が擡頭し来ることに何の不思議もありませぬ。

唯だ吾等の最も遺憾とするところは、今日の改造論が概ね欧羅巴に行はれたる改造を日本に於て模倣せんとするものに過ぎざることであります。或者はロシアを模倣しようとして無我夢中である。或者はイタリーを模倣しようとして和製黒シヤツ組を造ろうとする。その実現せんとする理想、乃至改造を叫ぶ動機は、両者の間に白雲万里の懸隔あるとは言へ、異邦に倣はんとする一点に於ては全く同一であります。或者はまた純乎たる理論に立脚して日本を改造すべしと主張します。而も其の理論なるものを点検し来れば、ついに欧羅巴の経済学、政治学、社会学的理論の埒外を出でず、まさしく西洋的理論と呼ばるべきものであります。

吾等の信ずるところによれば、改造の原理は之を内に求むべくして外に求むべきものでない。それ故に日本の改造とは取りも直さず純乎として純なる日本に復帰することであります。日本国家は天地と共に無限なるべき荘厳なる生命である。此の国家に於て改造を必要とするに至るは、内外幾多の事情によつて、国家的生命のうちに潜む善なるものゝ力弱り、悪なるものが横行跋扈来りて、本来の面目を蔽ひ去るが故に他なりませぬ。故に日本の改造は、この生命の奥底より善なるものを復帰し来り、之によつて現に横行する悪を折伏し、かくして純正なる日本を回復すること

以外にある筈がありませぬ。

今日の吾国の改造論者は、日本の悪を認むることに於て正しくして鋭い。まことに現代日本は、政治界にも、教育界にも、宗教界にも、決して此侭には捨て置かるべくもなき幾多の悪が横行して於ります。吾等は此悪を責むることに於て、一切の改造論者と共に鼓を鳴らすものであります。さり乍ら吾等は、彼等の如く他国の善なるものを借り来りて此悪と戦はうと思はない。吾等の善は、之を外に求めずして内に求めねばなりませぬ。吾等は日本的生命の裡に美なるものを把握し、之によつて現前の悪を打倒しなければなりませぬ。それ故に吾等は先ず純乎たる日本精神に復帰し、吾等の魂の衷に純正日本を確立しなければなりませぬ。かくしてのみ真個の改造が可能であります。此の精神によつて、然る後に他国の長を採るは可い。本末主客の顛倒は許さるべくもない。

第三　大化革新の回顧

一　危険思想としての儒教

日本の改造を念とする者に向つて、深甚なる教訓を与へるものは大化革新の経緯であります。儒教は今日の国の政治組織に欠陥があつたから行はれたことは勿論でありますが、初めて吾国に伝へられた時は、甚だ新しい思想であります。儒教は今日でこそ吾々にとりて古い思想でありますが、初伝当時の儒教は恐らく今日の共産主義が吾国に於て最も危険な思想となつて居且日本にとつて極めて危険な思想でもあつた。今日ではマルクスの共産主義に劣らぬ危険な思想を含んで居たといふことが出来ます。それは何故かと申せば、主権者即ち君主に関する儒教の思想は、日本在来の信仰と天地相容れざる相違があつたからであります。儒教に従へば君主とは有徳者が天命を受けて人民に君臨するものであります。書経に『天、有徳に命ず』と謂ひ、或は『天、有罪を討つ』と謂ふやうに、支那では徳がなければ君主の位を与へられるけれど、徳を失へば其位を追はれるものであります。徳の高い者が君主になると云ふことは、一見極めて合理的のやうに思はれますが、実際は甚しい不都合を伴ふものであります。何故ならば世の中には徳の優劣有無を定める客観的の標準がないからであります。

例へば或人が現在の君主に向つて、自分は貴方よりも徳があるから位を譲れと主張すると致します。若し其の君主が天命を受けたことになりま

す。乍併如何なる場合でも左様なる要求にオイそれと応ずる君主はあるものでない。従つて其の要求を拒絶するとなれば、両者の徳の優劣を図るものさしは何処にもないから、結局は力を以て君主の位を争奪することになる。若し要求者が敗れた場合は、乱臣賊子として葬り去られますが、反対に君主が敗れた場合は、所謂『放伐』の名の下に位を逐はれるのであります。此の禅譲放伐を幾度となく繰返して今日に及んで居ります。支那の歴史は、此の禅譲放伐の行はれるのが即ち支那の革命であります。革命は即ち『命を革める』ことで、天が不徳の君主を討つて、革めて命を有徳者に下すと云ふ意味であります。然るに此の思想は吾国の思想と全く相容れざるものであります。吾国では神武天皇の直系に非ざる限り、如何なる聖人君子が世に出やうとも、絶対に主権者となることは出来ませぬ。吾等の主権の基礎となるものは、徳でも智慧でも力でもなく、実に血統であります。ところが儒教は前に申したやうな思想を含んで居るのでありますから、明白に日本にとつて危険思想であつたと言はねばなりませぬ。

さて日本人は外来の思想文明に対しては、今も昔も敏感な民族でありますから、儒教が初めて伝へられた時も、直ちに之を歓迎して儒教並に支那文明の摂取に努めたのであります。そうして居る間に、支那では三国以来乱離を極めたので、乱を避けて吾国に帰化する者が多くなりました。彼等は高い文明の所有者として尊敬され、社会的にも政治的にも好き待遇を与へられた。彼等のうちには秦の始皇帝の子孫と称せる融通王の如く、百二十余県の民を率ゐて帰化したのもあり、雄略天皇時代には其の人口が一万八千を超えて居た。また後漢の霊帝の子孫と称せる阿智王も、十七県の民を率いて帰化し、魏の文帝の子孫と称せる安貴公も多数の供を連れて帰化した。此等の帰化人は工芸技術の教師として、吾国の文化に貢献したのでありますが、朝廷に於ても儒教を奨励し、諸国に記録の官を置くやうになつてから、多く彼等が之に任ぜられました。これは単に諸国の記録を造るのみならず、或は朝廷の出納を記帳し、或は使節として海外に派遣されるなど、当時に於ける最も重要なる官職の一つでありました。

かくて雄略天皇の時に至り、皇室の権威は空前に高まり、従つて歳入も増したのでありましたが、其下に在りて出納を役に任ぜられたのが蘇我氏であります。蘇我氏が頓に勢力を加えたのは此時からでありまして、彼等は自然蘇我氏の部下のやうな有様となり、蘇我氏の強大に伴つて彼等の勢力もまた加はつて来たのであります。かゝる間にも支那の混沌は止む時なく、後から〳〵亡命者が来ましたが、其等のうちには野心家も居り学者も居た。此の支那の読書人なるものが、昔も今も油断のならぬ先生でありまして、彼等は自然蘇我氏の部下のやうな有様となり、蘇我氏の強大に伴つて彼等の勢力もまた加はつて来たのであります。かゝる間にも支那の混沌は止む時なく、後から〳〵亡命者が来ましたが、其等のうちには野心家も居り学者も居た。此の支那の読書人なるものが、昔も今も油断のならぬ先生であります。それは儒教が治国平天下の学問でありますから、学問をする者は多く政治的欲望を抱くからである。此等の学者は、故国に於て目の当り王朝の顛覆、主権の更替を見て来た上に、支那人が日本で蘇我氏と相結んで確乎たる政治的勢力を扶植して居るのを見ては、持前の政権欲をそゝられて蘇我氏を傀儡として自己の非望を遂げやうと企らむことは、決して不可能のことではありませぬ。私は日本書紀のうちから此点に就て注意せねばならぬ箇処を指摘します。

試みに舒明天皇紀を読みますると、六年秋八月には『長星南方に見はる』とあり、七年春正月には『慧星廻りて東に見はる』とあり、八年春正月には『日蝕』とあり、九年春二月には『大星東より西に流る』とあり、元年五月に『客星月に入る』とあり、蘇我入鹿の従僕が『白雀子を得たり』とある。一体日本には天象に関する迷信はなかつたのであります。天地万物は皇室の祖宗の造られたもの、天皇は宇宙の主宰者の後裔として天下に君臨するのであるから、星が流れやうが慧星が出やうが、一向念頭にも置かなかつたのであります。ところが斯様な迷信が書紀に現はれたのは、言ふ迄もなく、帰化支那人の感化でありますのみならず、更に注意して見まするると、彼等は此の迷信を悪用して、皇室には不利に、蘇我氏には有利に牽強附会せんとした傾向が歴然として居ります。度々日蝕を云々したり、星が月を犯すを言つたりするのは、皇室の不祥を暗示するもので

あり、蘇我氏の家僕が白い雀をつかまへたと云ふたりするのは、言ふまでもなく祥瑞を数へ立てるのであります。これは決して無意味のことではない。深い計画あつての事と思はねばなりませぬ。蘇我氏に使嗾されて崇峻天皇を弑し奉つたのも東漢直駒と云ふ帰化漢人の子孫であります。彼は実に『吾は蘇我氏あるを知つて天皇あるを知らず』と放言して憚らなかつたのであります。蘇我氏の悪逆は、神道に背いて仏教に帰化したからだと言はれて居りますが、私は儒教の感化と帰化支那人の煽動とによるものと信じます。されば入鹿を宮中に誅して其屍を父蝦夷に賜はつた時、起つて皇命に抗しやうとしたのは帰化人であります。日本書紀には其間の消息を下の如く伝へて居る。――『鞍作臣（入鹿）の屍を大臣蝦夷に賜ふ。是に於て漢直等眷族を総べ聚めて、甲を擐、兵を持ち、大臣を助けて軍陣を設く』これは帰化人全部が蘇我氏叛逆の中堅となつて居たことを示すものであります。彼等は蘇我氏に向つて儒教の革命思想を鼓吹し徳あるもの王となるの主義を説き、蘇我氏を擁立して其の政権欲を満足せんとしたものと信じます。

二　大化革新の思想的背景

さて大化革新の主動者は、言ふまでもなく中大兄皇子と中臣鎌足でありますが、蘇我蝦夷父子が誅せられて、皇位に即き給ふたのが孝徳天皇であります。然るに孝徳天皇の思想信仰に就て、日本書紀は下の如く書いて居ります――『仏法を尊み神道を軽り玉ふ。人と為り柔仁、儒を好き玉ふ』。日本書紀には貴賤を択ばず、頻りに恩勅を降し玉ふ。儒教仏教が伝来してから、此の新しい思想信仰に対する天皇の態度を明記して居る。敏達天皇は『仏法を信ぜず、文史を愛す』とあります。文史は儒教の経典であります。用明天皇は『仏法を信じ、神道を尊ぶ』とある。古道は神道のことであります。皇極天皇は『古道を順り考へて政を為め玉ふ』とある。これは日本思想史を研究する者に重大な鍵を与へるものでありますが、今日は之を詳論する場合でない。唯だ吾々の問題となるのは、大化革新と云ふ重大

時機に皇位に即き給へる孝徳天皇が、仏教を尊び儒教を好み給ひて、神道を軽侮し給ふと云ふことである。

然らば実際の中心人物である中大兄皇子と中臣鎌足は如何なる思想を抱いて居たらうか。御存じの如く此等の両偉人は、共に南淵請安の弟子であつた。南淵先生は帰化漢人の子孫で、儒者であります。従つて儒教には通じて居たに違ひないが、日本の昔乍らの生命となつて居る神道に就ては、信仰も体験もなかつた人と見なければならぬ。この南淵請安が二人の先生でありますから、其の与へたところのものは儒教思想であつたに相違ない。

次に大化新政の実務に当つた国博士、これは内閣書記官長と法制局長官とを兼ねたやうな役目でありますが、之に任ぜられたのが沙門旻法師と高向玄理であります。両人とも帰化漢人の子孫で遣唐留学生である。僧旻は仏徒とは言へ当時第一流の儒学者であり、玄理また漢唐経術の蘊蓄は豊かであつたが、共に吾国の古道に通ぜざりし者と考へねばなりませぬ。

叙上の事実を総合して見ますれば、吾々は明瞭に大化革新の思想的背景を看得することが出来ます。此時の誓盟の辞は、恐らくの初めに於ては実に儒教的精神によつて行はれたものとしなければなりませぬ。それは孝徳天皇紀の記事が証拠立てふやうなことは、純乎たる支那流のやり方で、吾国では空前でもあり絶後でもあります。此時の誓盟の辞は、恐らく僧旻と高向玄理の手に成れるものと思ひますが、是亦明かに支那思想であります——『天神地祇に告げて曰く、天は覆ひ地は載せ、帝道唯一なり。而るに末代澆薄、君臣序を失へり。皇天、手を我に仮し、暴逆を誅し殄てり。今共に心血を瀝む。今より以後、君は二の政なく、臣は朝に弐くことなし。若し此盟に弐かば、天災し地妖し、鬼誅し人伐たむ。咬きこと日月の如し』。文中に『皇天、手を我に仮し』とあるは、商書の伊訓に『皇天降レ災、仮二手於我有命一』

とあるのから採つたもので、天神地祇も吾国の『あまつかみ』『くにつかみ』ではなく、支那的のものであります。
わけても『帝道唯一』と云ふのが、言葉からして純支那的理想であります。日本の天皇は『あまつかみ』たる神格を奪ひ去つたのが支那風の君主思想であります。それで玆にも帝道などと申して居ります。

次で七月十二日に至り、天皇は左大臣阿倍倉梯麻呂、右大臣蘇我石川麻呂に向つて、次の如く仰せられて居る——
『当に上古の聖王の跡に遵ひて天下を治むべし。復た当に信をもて天下を治むべし』。これまた非常な詔と申さねばならぬ。何故ならば玆に上古の聖王と云ふのは、神武天皇のことでもなければ応神天皇のことでもない。吾国の皇祖皇宗のことでなしに、支那の聖王のこと、堯舜禹湯文武のことであります。即ち支那の先王の道を遵奉して政治を行はうと云ふのである。支那では有徳作王主義でありますから、君主は有徳の故を以て命を天に受けたことを民に信じさせなければなりませぬ。故に民に信を示すと云ふことは最も肝要なことゝされて居る。さり乍ら吾国では、神武天皇の御子孫として皇位に即くと云ふことが無上絶対の信であつて、孝徳天皇が神武の裔として天津日嗣の位を継がれた其事以外に、また其事以上に、信を民に示す必要も方便もないのであります。

玆で最も重大なのは左右両大臣の態度であります。両大臣は果して如何なる態度を執つたか。書紀には明文がありませんが、前後の記事から推して明かに反対の意思を示し、天皇の御反省を求めたものとは思はれます。それは翌三十日に、天皇は更めて両大臣に下の如き詔を下されたからであります——『あまねく大夫と百の伴道等に、悦びを以て民を使ふの路を問ふ可し』これは天皇が両大臣の反対に合ひ、然らば百官相談上で新政の方針を定めよと、折れて出られたのであります。

かくて此日宮中に於て重大なる会議が開かれることになつた。会議の様子は日本書紀に載つて居られないけれど、瞑目して追想すれば其時の光景があり〳〵と浮んで来る。天皇は仏法を尊び儒教を好んで神道を軽んじて居られる。皇太子と中臣鎌足は南淵先生を師として儒教を学んだ人々である。政務の実際に当る国博士は両人とも帰化漢人の子孫である。満朝皆な是れ儒教主義者であります。其間に在りて日本の古道を主張して断乎として譲らなかつたのが左右両大臣だけであり、主として論難力説に努めたのが右大臣蘇我石川麻呂である。恐らく非常な激論の后に幸にも石川麻呂の精神が勝利を得て、翌十四日に彼は会議の結果を下の如く奏上して居る――『先づ以て神祇を祭ひ鎮めて、然る後、応に政事を議るべし』

神祇を祭ひ鎮めると云ふことは、大嘗会を行ふことであります。大嘗会は定められたる田から上がる新穀で、神酒を造り御飯を炊いて神前に捧げ、天皇親らも之を召上がる歴代の恒典で、即位式と併せて之を御大礼と呼ぶほどの重大なる儀式であるのに、大化革新の当初は、即位後一個月を経ても其の用意さへもせぬと云ふ有様であつたのであります。この石川麻呂の奏上によつて初めて人を遣はして悠基主基を定め、基の準備に取りかゝられたのであります。これは驚くきことゝ申さねばなりませぬ。大化革新が支那思想によつて行はれたことは、此の一事が最も有力に立証して居ります。それにつけても吾々は蘇我石川麻呂に対して深甚なる感謝を捧げざるを得ない。彼は和気清麿と並び称すべき日本の恩人であります。若し彼れの忠誠なかりせば、大化革新は吾国を如何なる危険に導いたかも知れなかつたのであります。彼れの在るありて、日本を支那たらしめることから救つたのであります。

想ふに中大兄皇子と中臣鎌足とは、十三日の宮中会議に於て、石川麻呂の主張を聞き、豁然として悟るところあつたに相違ない。皇子は神武の後裔で不世出の英雄であり、鎌足の家は代々神祇に奉仕せる家柄である。その学ぶところが儒教であり、且当面の改革に心思を労して居たので、吾国本来の精神を一時忘れて居たにもせよ、石川麻呂の論

議を聴くに及んで、其魂の底に昔乍らの日本の古道が驀然として蘇り来つたことゝ思はれる。さればこそ大化革新は此時を中心にして前後全く其の精神を異にして居ります。即ち以前は支那的であり、以後は徹底して日本的となつた私は此の顕著なる相違を日本書紀の記述から指摘します。

三　復興せられたる日本精神

大化革新の根本思想の一変は、先づ八月一日に東国の国司を召集して彼等に賜はつた詔に歴然と現はれて居る。それは『天つ神の所奉寄（うけよさせ）たまひしまに〳〵いま始めて万国を修めんとす』とあります。前には堯舜禹湯文武の跡に遵つて天下を治めやうとされたのが、今や俄然として支那思想の心酔から醒め、皇祖皇宗の大御心を奉じて政治を行ふと仰せられたのであります。これが正しき皇国の政道でありまして、国民に君臨し、国民は『神のまに〳〵』天皇に奉仕する以外に、日本にとりて正しき政治はあり得ませぬ。

次いで天皇の呼称も、帝道と謂ひ皇帝とも謂ふが如き支那風を脱却して、赫々たる日本的称号を用ゐられるやうになつた。即ち大化二年二月十五日に百官有司に下された詔の冒題には『明神（あきつかみと）御宇（あめがしたしらすやまとの）日本倭根子天皇（やまとねこのすめらみこと）』と仰せられて居ります。現神と云ふのは、天照皇太神の神格をそつくり其侭に具足した御方である。御宇と云ふのは、宇宙を統御するの意味で、これは宇宙の主宰者たる天照皇太神の神威又は神権を継承されて居るからである。天皇は『すめろぎ』又は『すめらぎ』と読み、統べる君即ち統一者の意味であります。天皇が是く仰せられたことは、取りも直さず支那的君主の理想から日本の昔乍らの雄渾なる天皇的自覚に立帰られたことを示すものであります。

かくして中大兄皇子の天皇に対し奉る態度も、以前の支那的のものでなく純乎として純なる日本的のものとなつたことは、大化二年三月二十日、天皇の下問に対する奉答のうちに最も明かに現はれて居る——『天皇我皇（すめらあかおほぎみ）の万民（みたから）を攸（やした）

はすべき運に属りて、天も民も合応へて、その政これ新なり。明かに明神として八嶋国しらす天皇、臣に問ひ玉はく云々』。

この日本の古道に復帰せる大化革新の精神を、更に堅固に確立したのが大化三年四月の名高い詔勅であります——

『神ながらも、我子治らせと故寄さし玉ひき。是をもて天地の初とともに、君と臨らす国なり。始治国皇祖の時より、天孫降臨に際し天照大神が下し玉へる厳勅を更めて宣言したもので、当時吾国を誤らんとせる儒教の有徳作王主義を根柢より否定し、森厳極まりなき日本の国体を昌言せるものであります。

かようにして大化革新は、当初は儒教的理想が主になつて行はれたにしても、幸に日本の古道に復帰して正しい根柢の上に立つた故に、あれほど急激にあれほど根本的な改造を断行したに拘らず国家は之が為に何等の禍を蒙むることなく、却つて奈良朝時代の如き国運隆盛の世を招徠したのであります。これは立つところ正しければ、如何に外国の制度組織を採用しても、之を国家に役立たしめ得ることを示すものであります。それ故に如何なる時代に於ても最も肝心なことは根本の確立であります。根本が確立さへすれば一切の場合に善処し、一切の事情を活用することが出来ます。これは大化革新の吾々に示す偉大なる教訓であります。

さるにても吾々の感激措く能はざるは蘇我石川麻呂の精神であります。私は序を以て此の偉人に就て少しく述べて置き度い。石川麻呂は入鹿とは従兄弟の間柄であつたが、鎌足の信頼を受けて大事を打明けられ、其女を中大兄皇子の妃に納れて深く結托し、入鹿を誅するの日は三韓の表文を読む大役を引受けたのであります。然るに事成りて右大臣に拝し、挺然敢言して大化革新の局面を一変せしめて以来、一世の尊敬を受けたと同時に、憚られ且嫉まれたものと見え、大化五年皇太子のため殺されて仕舞つた。その経緯は日本書紀に詳しく述べられております——

『三月の乙巳の朔、辛酉、阿倍の大臣薨ず。天皇朱雀門に幸してかなしみ玉ふ。皇祖母、尊皇太子、及び諸公卿、悉く随て哀み奉る。戊辰、蘇我臣日向、倉山田（石川麻呂）を皇太子に譖ちて曰く、僕の異母兄の麻呂、皇太子の海浜に遊び玉ふを伺ひ、将に之を害はんとす、反きまつらんこと其れ遠からじと。皇太子之を信じ玉ふ。天皇、大伴狛連三国麻呂公、穂積嚙臣を蘇我倉山田麻呂大臣の所に使はして、反むことの虚実を問はしむ。大臣答へて曰く、問はることの報は僕まのあたりに当に天皇之所に陳さむと。天皇また三国麻呂公、穂積嚙臣を遣はして其の反状を審かにせしむ。麻呂大臣また前の如く答へ申す。天皇乃ち軍を興こして大臣の宅を囲まんとす。大臣乃ち二の子法師と赤狛とを将ひて、茅渟の道より逃げて倭の国の境に向く。大臣の長子興志、是より先倭に在り、其寺を営み造る。今忽ち父の逃げ来れることを聞き、今来の大槻に迎へて、近くさきだちて寺に入る。顧みて大臣に謂ひて曰く、興志請ふ自ら直ちに進みて、来る軍を逆へ拒がむと。大臣許さず。この夜興志、こゝろに宮を焼かんと欲し、猶ほ士卒を聚む。己巳、大臣長子興志に謂ひて曰く、汝身を惜むか。興志答へて曰く、愛まず。大臣仍て山田寺の衆僧及び長子興志と数十人とにかたらひて曰く、大は人臣たる者安んぞ君に逆らうことを構え、何ぞ孝を父に失はんや、凡そ此の伽藍は元より自身のために造れるに非ず、天皇の御為に誓つて作れるなり、今我れ身刺（日向のこと）に譖ちられて横に誅されんことを恐るゝも、聊に黄泉に尚ほ忠を懐いて退らんと望む、寺に来る所以は、終りの時を安からしめんとなり。言ひ畢りて仏服の戸を開き、誓をたてて曰く、願はくは我れ生々世々君王を怨まずと、誓ひ訖りて自ら経きて死す。妻子の死に殉ふ者八。……是月、使者を遣はして山田大臣の資財を収めしむ。資財の中、好書の上には皇太子の書と題し、重宝の上には皇太子の物と題せり。使者還りて収むる所の状を申す。皇太子始めて大臣の心猶ほ貞浄なるを知り、追て悔ひ恥ぢることをなし、哀歎休み難し』。

国家の重臣阿倍左大臣が薨じて、物情騒然たりし時に、恐らく彼れの威望を嫉んだ異母弟が、彼を中大兄皇子に讒

言したのである。而して皇子が容易に此の議言を信じたのは、平生から彼を畏れ憚かつて居たからである。人臣の大義を一族従者に教へ、生々世々の忠節を仏前に誓ひ、議言を信じて自分を殺す皇太子に良書と重宝とを遺贈して、心静かに自尽したのでありまする態度は、末の代の末の代までも景仰を受くべきものであります。その沈着にして而も壮烈なる態度は、吾が国体が確保されたのでありてこそ大化革新の非常時に際し、かゝる偉人ありてこそ大化革新の非常時に際し、吾が国体が確保されたのであります。

四　非日本的諸相

今日の日本は、共産主義が国体の顛覆を企てると云ふ非常な時機に遭遇して居りますが、今の共産主義者は労農ロシアと相結び、マルクス思想を奉じて陰謀を企てるのであります。乍併蘇我氏の非望を抱きましたやうにならうとしたのは、当時の日本に非常なる欠陥があつたからであります。聖徳太子の如きは最も明瞭に此の欠陥を看取し、国家を是くの如き危険より救ふためには、蘇我氏の如き者をして乗ずる隙の無からしめるほど、思ひ切つた改革を断行しなければならぬと考へ、すでに其の準備に着手して居られたやうであります。中大兄皇子は其の精神を継承して改革を実行したのであります。同様に今日共産主義者が陰謀を企てるのも、今日の日本に重大なる欠陥があるからであります。故に蘇我氏の跡を絶つために大化革新が必要であつたやうに、共産主義者をして為すところ無からしめる為には、必ず昭和維新を必要とします。心ある者は此の一事を片時も忘れてなりませぬ。

さて今日の吾国の欠陥は、いろ〳〵な原因が複雑に絡み合つて生じたのでありますが、其の重大なる原因の一つは西洋に対する過度の崇拝であると思ひます。初めに申上げたやうに、日本は明治維新以来一心に西洋の制度文物を取

入れた。これは無論一面に於て非常に日本の為になつた。日本が世界の強国となり得たのも其の為めである。乍併外来文化が其国のために役立つのは、国民精神が緊張し、国民的自覚が強大である間に限ります。若し精神の緊張がゆるみ自覚が薄弱になれば、必ず本末主客が顛倒され、却つて災厄を招くことゝなるのであります。吾国も日露戦争までは国民が非常に堅固なる覚悟を抱いて居たので、外来の思想文明により益せらるゝこと多く、害を受けること少なかつたのでありますが、一度びロシアを破つて世界第一等国の仲間入りをしてからは俄に心に油断が生じ、それに加へて是迄の国民的理想――是非ともロシアに勝つて一等国民にならねばならぬと云ふ理想が一応は成就されたけれど、之に代るべき具体的理想を与へられなかつたので、個人でも国家でも志を失つた場合についても左様であるやうに、次第に精神がだらしなくなつて行つたのであります。

かうなつて来ると、今迄は役に立つて居た西洋の思想や文物が、いろいろな害を及ぼすやうになる。もと〳〵西洋の制度文物は、明治の初年に考へたやうな立派なものでなく、それ自身に幾多の欠点を具へて居る上に、西洋には良くても日本には適せぬものも多い。それが年と共に明かになつて来たのであります。吾々は洋意を去つて、純乎たる日本的立場から、総ての物事を判断しなければならぬ時に到達して居るのであります。而して純乎たる日本精神の本質を正しく把握しなければなりませぬ。そのために最も肝要なことは古典の研究であります。心を濃かにして古事記や日本書紀、乃至は万葉集を読みますれば、其処に日本精神の躍如たる姿を認めることが出来ます。吾々は斯くして把握した昔乍らの精神を、再び吾々の魂に復活させねばなりませぬ。これを能くした後でなければ、日本の改造は無駄でもあり危険でもあります。

第四　何故に国史を学ぶか

一　歴史の意義

ヘカイトス、ヘロドツス、ツキヂデスの三人は、西洋史の父祖と呼ばれる古代希臘の三大歴史家であります。この三人は、約五十年づゝ隔てゝ世に出たのでありますが、それぞれ歴史について下のやうに言つたと伝へられて居ります。先づ西紀前四五〇年代のヘロドツスは、歴史とは過去現在によつて未来を察知すべきものとしたのであります。即ちヘカイトスは歴史の重点を過去に置き、ツキヂデスは将来に置いたのであります。これは孰れも一理あることでありますが、此等の三者を綜合した方が、歴史の全面目を一層明かにすることが出来ると思ひます。

言ふ迄もなく歴史は人類発展の径路を研究するものでありますが、その径路は一貫不断のものであります。吾等は便宜のために過去・現在・未来と区劃して居りますが、現在は過去から生れて而も刻々過去となり、未来は現在に孕まれて而も刻々現在となり、行水の流れにくぎりを付け難いと同じく、実は分ち難き生命の流行があるだけであります。それ故に吾等はただ永遠の現在に生きて居るということが出来ます。而してこの『現在』は、其実に無限の過去と無窮の未来とを含む現在なるが故に、歴史もまた過去・現在・未来に関するもの、一層詳しく申せば過去によつて現在を説明し、現在によつて未来を推察するものとせねばなりませぬ。

この意味に於て直ちに思ひ起されるのは、水戸の彰考館であります。彰考館は徳川光圀によつて創立せられし水戸藩の修史局で、大日本史が此処で編纂せられしことは天下周知のことであります。この修史局に彰考館と名づけたのは、晋の杜預の『春秋左伝集解』序に『彰レ往考レ来』とあるに拠つたものと思はれます。彰往考来は、易の繋辞伝と謂ひ、論語に『温レ故而知レ新』と謂ふのと全く同一思想で、過去を明かにして将来を推察するといふ意味であります。従つて修史局の名称として、まことに適切無比といはねばなりませぬ。

吾等は永遠より永遠に亘る『日本的生命』の一断面でありまして世に立てるものであります。意識するとせぬとに拘らず、吾等は国民総体としても将又個々の日本人としても、実に日本歴史の全体を宿して居ります。今日の日本を知らずして明日の日本を知るべくもない。吾が現に生きつゝある国家、並に吾等自身を正しく把握するために必ず国史を学ばなければなりませぬ。司馬温公がその畢生の心血を注げる史書に『資治通鑑』と名づける如く、歴史はまさしく吾等の如実の姿を知るべき鏡であります。歴史を学ぶことは真個の自己を知ることなくしては、正しい行動も固より不可能であります。それ故に東洋に於ては、古来経史の二学を士人必修のものとして居たのであります。経学は今日の言葉で申せば哲学であり、史学は文字通り歴史であります。修身治人の道を究めることであり、而して之を究めるために経史を学んだのであります。昔は学問と申せば修身治人と申すのは道徳並に政治のことで、修身治人の道とは取りも直さず私人並に公人として正しく世に処する道といふことであります。

二　現代の国史無視

歴史を学ぶといふことは是くの如く重要事なるに拘らず、現代の最も著しき傾向の一つは、実に歴史を無視することであります。少くも今日の青年の多数は、自国の歴史に対して殆ど何等の興味を有せず、従つて心を濃かにして国

史を学ぶことをしない。而して是くの如き非歴史的傾向が、改造運動に没頭する青年の間に最も顕著なることは、一層驚くべき事実であります。なるほど改造は一面から申せば破壊であります。あらゆる旧いものゝ破壊であります。この改造の機運は、世界戦によつて激成された風潮で、東と言はず、西と言はず、社会国家の存するところ、皆な其波に洗はれざるは無い。日本ひとり此の風潮の外に立ち能はざるは言ふまでもありませぬ。あらゆる旧いもの風俗習慣も、制度文物も、乃至は思想信仰も、最早旧いまゝで存在することを許されず、改造即ち破壊の道程にあるものと思はねばなりませぬ。さり乍ら真個の改造は仮令破壊に始まつても、決して破壊で終つてはならない。その破壊は必ずや建設のための破壊でなければなりませぬ。

然らば其の建設の原理は、これを何処に求むべきか。先蹤を追ふのも確かに建設の一方法であります。或は最も容易に思はれる方法でもあります。吾等は国家社会を改造又は革新せる先蹤としてロシアを有しドイツを有し、またイタリーを有して居ります。而して吾国の青年の中には、徹頭徹尾ロシアに倣つて吾国を改造せんと熱中して居るものがある。或はムッソリニがイタリーを改革せるに倣はんとするものもある。純乎たる理論によつて、建設を試みるのもまた一方法であります。而も今日のところ吾国に於て唱へらるゝ純理は、ついに西欧哲学及び科学の理論を出でない。かゝる理論は之を西洋に施してさえ実行を不可能とするもの多く、之を日本に実現することは正に一個の空想に等しい。両者とも吾等の与し得ざるところであります。

如何なる国といはず、改造又は革新の必要は、国民的生命の沈滞・頽廃から生れます。生命の沈滞頽廃は、善なるものゝ力弱り、悪なるものゝ横行跋扈するによります。故に之を改造するためには、国民的生命の衰に潜む偉大なるもの、高貴なるもの、堅実なるものを認識し、之を復興せしむるところによつて、現に横行しつゝある悪を打倒しなければなりませぬ。簡単に申せば改造又は革新とは、自国の善を以て自国の悪を討つことでなければな

らぬ。そは他国の善なるが如く見ゆるものを藉り来りて、自国の悪に代へることであつてはならない。功しても木に竹をつぐだけのもので、決して樹木そのものの生命を更新するのでなく、別個の竹としてあります。それ故に建設の原理は、決して之を他国に求むべきものでなく、実に吾衷に求むべきものであります。

然るに吾衷に求むべき建設の原理は、唯だ自国の歴史を学ぶことによつてのみ把握することが出来ます。き改造の必要に当面しつゝある時代に於て、吾等はいよ〳〵歴史研究の重要を痛感する。たゞ明治以来史学者の研究が専ら考証詮索の方面に注がれ、之が為に歴史は現代と縁遠きものとなつて居ります。これは学問分化の自然の結果であり、考証を精密にするといふことは極めて必要のことではありますが、単にそれだけに止まることは史学の本旨でない。歴史は決して単なる記録の詮索ではありませぬ。記録は畢竟歴史の材料たるに過ぎない。例へば如何に多くの植物や動物を集めても、それだけで植物学が成立するものでなく、与えられたる材料を一個の原理によつて取捨選択したる後に、初めて特殊の科学が成立するやうに、歴史もまた現実の原理によつて過去の事実を取捨選択せる知識体系であります。明治以来吾国の史学界の傾向は、主として歴史のための材料を発見し蒐集することにありましたから、史学者と言へば古文書をいぢくる人のやうに世間は思つて居るのであります。吾等は前に申上げたやうな時代に当面して、殊更切実に真個の国史学者、材料提供者に止まらざる真個の国史学者、大処高処に着眼して全体を正しく摑む国史学者の出現を翹望して止みませぬ。而してこの翹望は、文学博士平泉澄氏の努力によつて必ず満足せしめるべきことを私は信じて居ります。私は先年平泉博士が発表せられたる『国史学の骨髄』と題する一編を読んで至心に感激し、爾来今日に至るまで国史研究に於ける吾師と仰いで居ります。平泉博士の如き、史学者の出現によつて、国史は初めて生命を与へられ、新日本建設の生命の泉となり得るのであります。

三　日本書紀

さて吾国に於ける最初の且根本の歴史は日本書紀であります。何故に朝廷が此の歴史を編修せられたかを知ることは、国家と歴史との関係、従つて歴史の重大性を明かにする上に極めて肝要なことであります。日本書紀はまさしく国民的自覚並に反省の所産である。然らば其の自覚は如何にして生じたか。それは大和民族の発展が一定の程度に達したためであることはいふまでもないけれど、此の内面的事情の外に、直接して有力なる外面的刺激があつたからであります。その刺激は取りも直さず支那との接触であります。我の確立は非我との対立に待つ。それは個人の場合でも民族の場合でも同じことであります。日本は支那との交通によつて明瞭なる国民的自覚を生じたのであります。

吾国は支那と接触して、推古天皇以来盛んに隋唐文明を取入れ、大化革新の如き、之を表面についてのみ見れば、恰も日本を以て小支那たらしめたる如き観があります。それにも拘らず日本は毫も昔乍らの大和魂を失はざりしことは、当時吾国の支那に対する態度を見れば明白であります。聖徳太子が隋の煬帝に対して『日出処天子、書を日没処の天子に致す、恙無きや』との国書を致せる如き、また天智天皇が百済を援けて唐帝国と戦へる如き、それだけ吾等をして感激に堪えざらしめるものであります。されば此の点に於ては模範とせる支那であるけれど、之を扱ふに外蕃を以てせるところに、支那帰化人を蕃別の部に編入して居るに際しても、姓氏録を撰ばせられるに際しても、雄大森厳なる精神が躍動して居ります。これを今日吾国の共産主義者が、ロシアを『吾が祖国』と呼んで恥ぢるところなきに比ぶれば、正に天地雲

泥の差と申さねばなりませぬ。

かやうに支那に接触し、その文明を採用すると共に、日本的自覚が強大となつたので、之に伴ふ国体の尊厳を内外に示すために、朝廷に於て国史の編修を企てられたのであります。き修史事業を創められたのが聖徳太子で、天皇紀、国記、臣造伴造国造百八十部、並に公民の本記を撰修されたのでありましたが、国記を除く其他の記録は、不幸にして蘇我氏と共に亡び、国記もまた後には散佚して其の内容を知るよしもなくなりました。其後天武天皇の時に至り、更めて国史編纂の業を創められ、それが元正天皇の時に完成せられて、日本書紀として今日に伝はつて居るのであります。而して最初に是くの如阿礼の伝誦を撰録した古事記も出来ました。かくの如く修史事業が盛んであつたのは、全く日本建国の由来及び精神、でありますす。

さて日本書紀が特に国号を冠したのは、独り国民に対して建国の由来精神を知らしむるのみならず、外国に対してまた国体の尊厳を宣揚するために編修されたものだからであります。それ以外の歴史は、単に天皇紀、国記、古事記といふ風に『日本』と特別に銘に打つて居ないのであります。外国と申しても主として支那でありますが、言ふ迄もなく当時の支那は唐朝の盛時であり、吾国が盛んに其の文物制度を取入れた先進国でありますす。その先進国に向つて吾が日本は是くの如き荘厳なる国柄であるぞと示すために、日本書紀を編修したといふことは、日本精神の不羈独立を立証するものとして、吾等の最も感激に堪えざるところであります。かやうに支那にも示す目的でありますから、文章も堂々たる漢文で、漢籍の章句を藉り来つて大いに記事を潤飾して居ります。そのために本居翁を初めとし多くの国学者は、古事記を尊重して日本書紀を疎んずる傾向がありますけれど、これは吾等の賛同し兼ねるところであります。なるほど文章は漢文であり、形容修辞に苦心はして居りますが、そのために些かも日本の真面目が蔽はれて居

りませぬ。これは書紀編修者が明確強烈なる日本的意識を以て事に従つたからであります。特に神代巻に於ては『一書曰』として総ての異説を列記し、些かも臆断を下さず、また事実を蔽はんとせざるところに、公平無私にして天空海濶なる日本精神が、わけても躍如として現れて居ります。古事記と共に最も尊重すべき古典と申さねばなりませぬ。

さて日本書紀三十巻が完成されたのは、元正天皇の養老四年のことでありますが、直ちに日本書紀の講義を宮中に開かせられ、親王・太政大臣・左右大臣より参議に至るまで、皆な講義を陪聴せしめられ、講義終れば饗宴を催して陪聴者一同に饗応を賜はり、饗宴中に日本書紀に現れたる人物を題として和歌を詠ませるのが例となりました。これは国家の政務に当る者をして、建国の由来を忘れざらしめんとする大御心に出でたものと拝察せられます。かく一方に於て日本書紀の講義をなさると同時に、他方に於ては日本書紀の後を承けて、つぎ〳〵に国史の編修を行はせられ、所謂六国史が出来たのであります。

四　国史と国家

かやうな次第であるから、国史の尊重と国家の盛衰とが、常に相伴ふことに何の不思議もありませぬ。何となれば国史を尊重するといふことは、取りも直さず国民的自覚の強烈を意味するからであります。現に藤原氏専権の世となつてからは、日本書紀の講義も、国史の編修も、両ながら中絶してしまひました。それは日本建国の精神を明かにし、国体の本義を反省することは、藤原氏にとりて不利だからであります。而も建国の精神を没却して国家が栄える道理はない。平安朝の末期藤原氏専権時代の日本は、殆ど無政府ともいふべき乱脈に陥つたのであります。

後三条天皇は政権を藤原氏の手から再び朝廷に収められましたが、白河天皇が更に其の御遺志を継がれ、譲位の後

に所謂院政を始められました。院政は最も目立たぬ方法で、政権を皇室に回復するための制度で、吾等は之によつて偉大なる政治的手腕を白河天皇に於て見奉るものであります。かゝる雄志を抱いて居られましたから、絶えて久しかりし国史編修のことも思立たれ藤原信西をして本朝世紀を撰述せしめられたのであります。かくて、政権武門に移るに及んでは、また朝廷に於て修史の御企てなく、日本書紀の講義もなかつたのであります。

後醍醐天皇の建武中興は、仮令回天の偉業中道にして挫折したとは言へ、まがふべくもなき日本精神の勃興なるが故に、この精神の最も見事なる結晶として、北畠親房の神皇正統記が生れたのであります。神皇正統記は、建国の精神を明確端的に宣揚せる点に於て、真に空前の史書であり、平泉博士がいみじくも道破せる如く、前に遠く建国創業をのぞみ、後に遥に明治維新を呼ぶところの国史の中軸であります。平安朝の末葉から鎌倉時代の初めにかけて国史を等閑に附したことは、当然国体観念の昏迷を招ぎ、今日から考へて到底許し難い思想が行はれて居ました。例へば慈鎮和尚の愚管抄に現れた思想であります。慈鎮和尚は法性寺関白藤原忠道の子でありますが、其著の中には天皇のことを皆な『国王』と書き、甚しきは礼記の百王説を其侭に取入れて『皇統百代限り』といふやうな妄誕至極の言をなし、『神の御代は知らず、人代となりて神武天皇以後百代とぞ聞ゆる。既に残り少なく八十四代にもなりける』といふ驚くべき思想であります。八十四代と申すのは順徳天皇のことで、もう十六代で日本の皇統は亡ぶといふ驚くべき思想であります。また延暦寺には番神なるものがあつて、法華経の守護をなさることになつて居た。初めは十二支に当るそれぞれの日に一柱の神が交替に守護するといふので十二番神、後には月の三十日に対して三十番神を置くやうになりましたが、この日の番神は畏多くも天照大神であります。天照大神を法華経の番人にして怪しまぬ時代であつたのであります。かやうな時代の後を承けて、わが北畠親房が『大日本は神国なり』と高唱し、神胤永く此世に君臨して天壌と共に無窮なるべきことを明確に力説したのは、正に一句鉄崑崙、虚空をして稀有と叫ばしむるものであります。

此書一たび出でゝ、大義名分の存するところ、煥乎として千歳に明かになつたのであります。

室町時代は初めから国家的統一がなかつたのでありますが、応仁乱以後は一層乱雑を極めました。皇室の式微も此頃を以て空前絶後とします。吉田兼倶を召して之を進講せしめ、古への如く親王・大臣・公卿を陪聴せしめられたことは、取りも直さず日本精神再興の前兆であります。爾来日本書紀の講義が次第に行はれ初め、親王公卿を初めとし地方の豪族も学者を招聘して之を聴聞するやうになりました。次で後柏原天皇及び後奈良天皇が、共に鋭意朝廷の再興に御心を砕かれた。後柏原と申上げるのは、後奈良と申上げるのは奈良天皇即ち平城天皇に対し奉るものでありますが、まことにこの両天皇は桓武平城の盛世を復興するために、非常の御苦心であつたのであります。後奈良天皇の如き、日常の供御にさへ差支へられ臣民に宸筆を賜はり、其の礼物を以て御生活を続けられたほどの御窮困であらせられたに拘らず、その御日記の毎月朔日の条に『万国治平・百蛮帰服・朝廷再興』又は『海内静謐・朝廷再興』と書かせられたるを見て知り得る如く、荘厳偉烈の御精神を以て、皇室の復興を図られたのであります。之について吾等の最も感激に堪えざるは、当時周防の大内義隆が日華門御造営料として金一万匹を献上し、其後も度々供御を助け奉つたことがあり、それらの功労に対しても今度の奏請は勅許になりそうに思はれるのに、断乎として之を斥けられたのは、千古その凛然の御精神を仰がしむるものであります。この御精神が天下の人心をして皇室に嚮はしむるの気風を開かれたのは当然のことで、戦国の諸雄多く心を皇室に寄するに至り、ついに正親町天皇の御代に織田信長出でゝ皇室を再興し、天皇を奉じて天下に号令し、豊臣秀吉其後を承けていよ〳〵皇室を尊崇し、国民をして再び天日を仰がしめたのであります。

徳川氏は皇室を宗教的に尊崇しましたが、全く政治的権力を取り去りました。これは言ふまでもなく日本の国体から申せば変則の政治であります。然るに徳川氏の史学奨励は大いに国史の研究を促し、水戸藩の編修にかゝる大日本史を初め、保建大記・中興鑑言の如き、乃至は日本外史・日本政記の如き、国民をして国体の本義を反省せしむる幾多の著書が世に現れ、ついに明治維新の機運を促進するに至つたのであります。

以上の事実は、史学の消長と国家の盛衰とが常に相伴ふことを示して居ります。これは歴史が国家を隆盛ならしめるといふよりは、史学によつて覚醒せられ喚起せられた日本精神が国を興こすのであります。それ故に吾等は、殊に現今の如き時代に於て、国史の研究の重要なることを力説したいのであります。ただ正しい国史の研究のみが、吾等をして日本歴史の尊貴、日本民族の偉大、日本国体の荘厳を体得せしめるのであります。

第五　国史による日本精神の把握

一　象徴としての正倉院

仏典に下のやうな比喩が説かれて居ります。昔舎衛国の山中に百匹の猿が棲んで居たが、その猿で、一匹の猿だけに鼻があつた。すると九十九匹の鼻欠猿が鼻のある猿を片輪者と罵り、罵られた猿は折角の鼻を悲観したといふのであります。これは甚だ面白い比喩で、吾等は此の比喩が適切に当て嵌まる事実を常に目撃して居ります。支那にも『千人の諾々は、一士の諤々に如かず』という言葉がある通り、真理は決して多数決できまるものでないに拘らず、とかく人間は多数を恃み、また多数に動かされる弱点を有つて居ります。『何ぞ人言を畏れん上にも明白に現われている。今日の吾が同胞は、わが国民並に国体に関する思想の ひ、日本も一つの国家である以上、格別他国と異なる筈はないと考へて居ります。

かくの如き傾向は、人間に本具なる多数を恃み多数に動かされる弱点と、世界に漲るデモクラシーの影響とによつて助長されたものであります。デモクラシーの思想は、総てのものを同一水平面に並立せしめんとします。そは貧富貴賤、美醜高低を平均し去り、或る特殊の神聖優越なるものゝ存在を承認しない。そは天才を気狂扱ひにし、英聖を凡人化すると共に、小人凡夫をも一定の平準点まで高めやうと努める。そは強国の雄大なる理想を否定すると同時に弱国の地位を高めて之を世界的水平線に達せしめんとする。この水平運動は固より重大なる世界的意義を有し、人類

の向上発展に資するところ多きは言ふ迄もありませぬ。従つて今後も続行せらるべく、またせしめらるべきものであります。

さり乍ら吾等は、断じてこの思想運動に伴ふ弊害に捲込まれてはなりませぬ。野蛮を文明ならしめ、醜悪を善美ならしめ、低きを高からしむることは飽迄も之がために努力しなければならぬ。而も神聖を冒瀆し、偉大を平凡化し、荘厳を低劣化する必要は毫末もありませぬ。啻に必要なきのみならず、却つて総てを至高至善の段階にまで引上げることが吾等の志でなければなりませぬ。不幸にして明治以来の吾国の史学界の傾向が、他国に冠絶せる我国の歴史を世界的平凡点に引下げんとするに在りしかの如く思はれるのは、吾等の最も遺憾とするところであります。他の民族が貴ぶべき歴史を有せざる故を以て、吾国もまた然りと考へるのは、以ての外の本末顛倒であります。九十九匹の猿が鼻がないからとて、自分の鼻を否定し去るやうな愚は、吾等の決して学んでならぬことであります。それ故に私は、私の観るところに従ひ、いろいろな点から日本歴史の特性を明かにし、日本並に日本民族の偉大を立証しやうと思ひます。

御存じの如く奈良の正倉院は、聖武天皇の御遺物を東大寺に奉納し、之を収蔵して居る建物であります。其中には支那はいふまでもなく、西域又は欧羅巴から伝はつた物まで其侭に今日まで儼存して居り、火鉢の中には千有余年以前の奈良朝の灰までが残つて居るのであります。乱暴な人間があれば容易に破り得る木造の建築であります。それが戦国乱離の時代に於ても一人の之を侵す者なく、また兵火の災厄にも遭はず、建物と共に其中の御物が完全に今日まで伝へられて来たといふことは、実に驚くべき事実と申さねばなりませぬ。

然るに翻つて考ふれば、日本国そのものがまさしく一個の正倉院であります。若しくは正倉院は日本そのものの象徴であります。何となれば日本国に於ては、啻に上古に於ける民族固有の思想信仰が、脈々として今日に伝へられて

居るのみならず、すべての外来の思想文明を今日まで生命あるものとして保存したからであります。恰も正倉院の御物の中に、支那や西域に求むべからざる幾多の芸術品が残つて居るやうに、日本文明のうちには本国の支那や印度に於て亡び又は衰へたるものが潑剌たる生命を以て生きて居るのであります。支那思想の精華、従つて支那文明の根拠は、いふまでもなく孔孟及び老荘の思想でありますれば、支那はついに儒教を生かすことが出来ず、儒教もまた支那を救ふことが出来なかつた。これは支那の歴史を読めば明瞭なことであります。支那思想の精華、従つて支那文明の根拠は、いふまでもなく孔孟及び老荘の思想でありますれば、支那はついに儒教を生かすことが出来ず、儒教もまた支那を救ふことが出来なかつた。これは支那の歴史を読めば明瞭なことであります。之を孔孟の思想即ち儒教について見ますれば、支那はついに儒教を生かすことが出来ず、儒教もまた支那を救ふことが出来なかつた。これは支那の歴史を読めば明瞭なことであります。それにも拘らず儒教に関する議論は盛んに行はれた。汗牛充棟もたゞならぬ書物が著はされたのであります。然るに吾国に於ては蒐道稚郎子皇子の自殺が悲壮に立証する如く、儒教伝来の当初より最も忠実に孔孟の教を躬行実践せんと努めました。而して儒教を日本的要素を排除し、よく之を消化して、国民の道徳的並に政治的生活を向上するに役立たしめ、以て今日に及んで居ります。老荘の教も同然で、今日支那では老荘の思想は迷信的な民間信仰と相結び、所謂道教として行はれて居ります。さり乍ら道家が利用する老荘思想は老荘の真精神の甚だしき牽強附会か、さもなくば腐敗堕落であります。然るに吾国に於ては老荘の思想が国民的生命の中に融合し、民族性の一特徴を作り上げて今日に及んで居る。例へば吾等が枯淡閑寂を愛するこころ、さびを愛するこころは、実に之を老荘と禅とに負へるものであります。而して此の心は、わが国民の芸術的宗教ともいふべき茶道並に華道として発達し、国民をして能く一輪の花に全宇宙の美を賞する霊遠典雅なる情緒を養はしめて居るのであります。

これは印度思想の精華ともいふべき仏教についても同様であります。印度の歴史が立証するやうに、仏教は印度を活かすことが出来ず、印度もまた仏教を生かすことが出来なかつた。現に今日の印度に於ては、ただ錫蘭の一角に原始的な小乗仏教が僅に余喘を保つて居るのみで、印度大陸に於ては全く其跡を絶つてしまひました。仏教は支那を経

て吾国に伝はつたもので、支那は仏教の第二の故郷でありますが、曾てはあれほど盛大を極めたりしに拘らず、支那に於ても仏教は今や全く生命を失ひ、ただ其の残骸を留むるだけであります。然るに吾が日本に於ては、釈尊の思想信仰に孕まれる一切の要素が、其到るべき頂点まで発達せしめられ、印度にも支那にも見ざる純一にして深刻なる諸宗門を生み、今日尚ほ国民多数の宗教的生活を支配して居ります。日蓮上人は日本を以て『大乗相応の地』と申しました。適確に其通りであります。

吾等は旧きものを失はずして新しきものを抱擁し行く此の精神、その抱擁せるものを正しく生かし行く此の精神を飽迄も保持し長養して行かねばなりませぬ。吾等は日本をして永遠に『正倉院』たらしめねばならないのであります。

二　日本精神の両極性

さて日本がその精神の裏に取入れた儒教と仏教とは、まさしく亜細亜精神の両極であります。一は飽迄も世間的、一は飽迄も出世間的、一は飽迄も現実的にして他は超越的、一は飽迄も実践的にして他は形而上的、一は飽迄も対立的にして他は絶対的であります。此の亜細亜精神の両極が、実に日本精神のうちに見事に取入れられ、民族の最も誇るべき特性を形成して居ります。それは一面常に高遠なる理想を仰ぎつゝ、而も断じて現実を忘るゝことなきこゝろ、最も厳粛に現実の生活にいそしみつゝ、而も常に理想を思慕するこゝろであります。現象即実在といひ、理想即現実といひ、娑婆即寂光土といふことは形而上学的論議としては珍らしくありませんが、何の議論も理屈もなしに、この深奥なる真理を生活の上に実現しつゝあるところに吾等は吾が民族の偉大を認めずに居られませぬ。わが国民は大乗の極意を何の苦もなく実践躬行して行く。私は是くの如き精神の最も見事なる

代表者として、織田信長を挙げることが出来ます。信長の日頃愛誦して措かざりしは『敦盛』の舞の曲の『人生五十年、化転のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり、一度生を得て滅せぬものゝあるべきか』といふ一句であつた。彼が生涯の運命を決すべき桶狭間の戦に出陣する間際にも、彼は起つて『敦盛』を舞ひ乍ら高らかに之に誦したことは世間周知の語草であります。信長は常に人生僅か五十年と覚悟を決めて居た。宇宙の悠久に比ぶれば人生の如何に果敢なきを身にしみて感じて居た。若しこれが印度人又は支那人であつたならばこれほど深刻に諸行無常を悟れば、出家隠遁して世間と離れるのを常とします。そして多くは宗教的生活又は風流の生活に身を委ねるのであります。然るに信長は、人生五十年と観念し、生者必滅と悟り乍ら、人身を受けて此世に在る間は、人生を律する法則を厳かに守りて善戦健闘倦み疲れるを知らなかつたのであります。これは独り信長のみでなく、典型的日本人に等しく見るところの勝れたる特性であります。

私は曾て東京郊外赤羽の静勝寺といふ寺で、太田道灌の木像を見たことがあります。此像は道灌の恩顧を受けた雲綱といふ僧の刻んだものと言ひ伝へられ、身には道服を纏ひ、手に払子を持ち、片膝を立て、左側に小刀を置いて居る見事な作であります。道灌は御存じの如く、関東第一の武者であつたが、軽卒暗愚なる主人上杉定正のために、入浴中に暗殺された人であります。彼は此の不意打に遭つても毛頭悪びれず、突込まれし槍の柄をしつかと押へ乍ら

かゝる時さこそ命の惜しからめ
かねてなき身と思ひ知らずば

といふ辞世を詠み、泰然として死に就いた。私は静勝寺の木像を見て、非常な感激に打たれたのであります。それは生をあきらめつゝ、而も武士としての本分を徹底して果さずば止まぬ日本人の面目を、其の木像に於て見たからであります。私は同様の例を枚挙するに堪えない。たゞ理想と現実とを相即せしめ、決して一方に偏せざる所に、日本

民族性の偉大があることを力説するに止めて置きます。而して此事は明治維新の一人、横井小楠の次の詩に最も簡潔に詠み尽されて居ります——

不レ流レ二功利一不レ流レ禅　大丈夫心希二聖賢一
終生尽二得堅苦力一　披二雲霧一欲レ見二青天一

さて後代に於ける日本人の超越観は、主として仏教によりて養はれ、現実観は儒教によりて鍛はれたものでありますが、この理想と現実とを相即せしむる素地は、すでに上古の日本思想、儒教以前の日本精神に、明かに具はつて居たのであります。古事記及び日本書紀によつて知り得る如く、吾等の祖先は世界を分ちて高天原、中国及び根国の三として居ました。高天原は理想の世界、中国は現実の世界、而して根国は質料の世界であります。現実の世界は、理想によつて質料を統制して行くことによつて、不断の発展を遂げて行くのであります。而して中国の君主並に臣民が高天原から降臨したといふ信念は、理想と現実の関係が密接不離なることを体得したから生じたものであります。斯様な性質を具へて居たればこそ、日本民族は能く亜細亜精神の両極を摂取して、其魂をいよいよ深刻偉大ならしめることを得たのであります。

ダンテの神曲は、私の愛読措かざるところのものでありますが、ダンテは此詩の中に於て、ユダとブルタスとを共に地獄のどん底に投げ入れて居ります。ユダは基督を売れる者、即ち精神の王国を乱る者であり、ブルタスはシーザーに叛ける者、即ち現実の王国を乱る者であります。此の二つの王国は相即不離のものになるに拘らず、欧羅巴わけてもダンテ時代の欧羅巴に於ては、厳刻に此の両立を対立させて居ました。従つて基督とユダとを問題とする人はシーザーとブルタスとを念頭に置かず、シーザーとブルタスとを念頭に置く人は、基督とユダとを問題としなかつたのであります。かやうな時代に於てダンテが、基督とシーザーとを同功とし、ユダとブルタスとを同罪としたことは、

彼れの精神の明朗透徹を物語るもので、欧羅巴人としては稀有絶群の識見と申さねばなりませぬ。而もかくの如き識見は、日本人に在りては、尋常茶飯のことであります。真個の日本人は皆な此の道理を実行の上に現はして居りまして来たのであります。さればこそ吾等は『禅』即ち抽象的理想に溺れず、『功利』即ち浅薄なる実利主義に囚はれず、能く中道を濶歩して来るものを率ゐることができ、また総てを率ゐつゝ己れを偉大ならしめることが出来ます。日

三　日本精神の偉大性

如何なる川も決して初めから大河ではありませぬ。黄河、揚子江の大を以てしても、その源に溯ればつひに谷間の小川に過ぎない。たゞ幾多の支流を合せ、落ち来る総ての水を東海に嚮はしめ行く間に、おのずから千里の長江となるのであります。まことに一切の長江大河の偉大は、己れに注ぎ入る一切の水に、嚮ふところを与へることに存する。そは斯くすることによつて、同時に己れを豊かにし、大きくし、強くするのであります。

このことは吾等の精神生活に於ても適切に同一であります。個人の魂、而して民族の魂は、決して生れながらに豊富荘厳偉大なのでありませぬ。博く学び、濃かに思ひ、篤く行ひながら、その魂に入り来る一切を抱擁して、嚮ふところを之に与へることによつて、歩々偉大となつて行くのであります。それ故にニイチエは『偉大とは方向を与へることだ』と道破して居ります。方向を与へること、嚮ふところを知らしめることが、取りも直さず偉大なる魂の力であります。此力を具へたる魂は、総てを受け容れて己れの魂を偉大にし、豊かにし、且かくすることによつて一切のものに真個の意義と価値とを与へるのであります。

然るに方向を他に与へるためには、必ず自ら目指すところがなければなりませぬ。これありて初めて総て己れに入り来るものを率ゐることができ、また総てを率ゐつゝ己れを偉大ならしめることが出来ます。目指すところ、魂の嚮

ふところは、言ふまでもなく理想であります。それ故に吾等の魂の充実と発展とは、確乎不動の理想ありて初めて可能であります。日本精神が亜細亜精神の両極を摂取し、之によつて自らを豊富深刻ならしめると同時に、その故国に於てさへ不可能なりし両者のの真個の意義と価値とを発揮せしめることが出来たのは、言ふまでもなく日本精神が一切に方向を与へる力を具ふるためであります。而して能く一切に正しき方向を与へることが出来たのは、取りも直さず正しき理想を抱く故であります。

然らば其の理想とは何か。吾々の祖先が此国を肇むるに当り、全心全霊を挙げて確立せる理想は実に『あまつひつぎのみさかえ、あめつちとともにかぎりなけむ』ことでありました。げに日本建国の理想は此の一句に尽され、此の一句こそ古事記、日本書紀の中軸となつて居るのであります。古事記、日本書紀の神代巻に於ける自余一切の立言は要するに此の一事を説いて居る。何となれば日本民族は、祖宗以来の天地開闢に関する思想信仰を伝承して来たからであります。而して吾等は其の開闢説を通して日本民族本来の特性を認識し得るが故に、それは吾等にとりて珍重至極のものであります。さりながら記紀の神代巻は、猶太の創世記や印度の倶舎論のやうに、宇宙生成そのことを主題とせるものでなくその専ら心血を注げるところは、天壌無窮なるべき皇室の淵源を明かにし、皇統の由来するところ悠遠にして森厳なるを力説するに在つたのであります。

万世一系の理想は余りに屢々口頭に上せられた為に、今の世の人々は却つて其中に含まるゝ深奥なる意義を反省しやうとせぬ傾きがあります。而も単に之を其の外面のみに就て見るも、古代諸国の建国理想のうち、かくの如く雄渾にして確信に充ちたるものが他にもあるか。吾等の知る限りに於ては、僅に秦の始皇帝が朕を始皇帝として、二世三世より万世に伝ふべしと豪語したのがあります。而も実際は僅に二世にして亡国となつてしまひました。支那の学者

は始皇帝の抱ける如き万世一系の理想を以て、罵笑すべき不可能の夢となし、革命即ち王朝の交替を当然の事としたのであります。然るに吾国に於ては支那に於て談罵の種にされる此の理想を奉じ、能く之を実現して今日に至り、尽未来際に及ばんとして居ります。そはまさしく人類の歴史に於ける一個の不可思議であります。曾てマコーレーは、羅馬法王朝について下の如く論じて居ります。――『地上に於て人間の作りし事業のうち、羅馬教会の如く研究の価値あるものは稀れである。この教会の歴史は、人類文明の二大時期を繋ぐものである。犠牲を焼く煙がパンテオンより上りし時、フラビアの円戯場にジラフと虎とが駆けまわりし時まで人心を溯らせ得るものは世界に於て唯だ此の教会だけである。世界に於て其の系図の遠きを誇る最も永続したる王室も、之を法王朝に比すれば其の年齢は赤子の如く稚い』と。わが皇室は法王朝に比して一層久しい歴史を有して居る。若しマコーレーにして日本の皇統連綿を知つたならば、一層其の驚きを大にしたことゝ思ひます。

四　皇統一系の内面的意義

天つ日嗣、天壌と共に無窮なることは、更に重大なる内面的意義を有して居ります。わが日本民族は、此の理想を堅確に把持し来れるが故に、今日在るを得たのであります。それ故に万世一系といふことは、日本民族が万世に独立し繁栄することを必須の条件とします。国乱れて民亡ぶ。而して国乱れ民亡ぶ原因は、如何なる例外もなしに、主権が薄弱微力となるからであります。日本の古典が、日本を以て『天雲の向伏す限り、谷蟆のさ渡る極み、皇御孫命の大御食国』となし、若し『御代々々の間に、まつろはぬ穢き奴もあれば、神代の古事のまに〳〵、大御稜威をかがやかして、たちまちに打滅ぼし給ふものぞ』として、吾国の主権を万古不動の礎の上に置きたることは、まさしく国家永遠の繁栄の礎を置い

たものであります。

試みに隣邦支那を見よ。支那に於ける主権の基礎は、天命であります。即ち天が有徳者に命じて君主たらしめるのであります。例へば書経に『天、有徳に命ず』といひ、或は『天、有罪を討つ』といひ、或は『商の罪盈貫し、天、命じて之を誅せしむ』とあります。上天は有徳者に命じて君主たらしめる。而して君主その徳を失へば、上天は命を革めて他の有徳者を君主たらしめる。これが支那の主権に関する根本思想であります。この思想は一見甚だ合理的であり、有徳者が国家を統治すればこれほど幸福なことは無いやうに思はれますが、実際には幾多の困難が伴ひます。何となれば、徳の有無優劣を定める客観的標準は何処にもありませんから、徳の有無といふことは、ついに力の優劣といふことになるからであります。支那の歴史はそれ故に幾度となく禅譲放伐を繰返して今日に及び、其間未だ曾て真個の挙国一致を知らず、未だ曾て其の民族国土を防護するの力を養ひ得なかつた。さればこそ四億の大民族を以てして、夷狄と侮蔑せる異民族の征服をも受けねばならなかつたのであります。日本が東海の小嶋嶼に拠り、数千万の民族を以て、能く支那の如き運命を免れ得たのは、苟くも国家に危険の迫る毎に天皇の号令の下、挙国直ちに一致して国難に当り得たからであります。従つて吾等は、日本の皇統万世一系なることが、同時に国民福祉の根源なることを切実に反省しなければなりませぬ。

かくの如くにして吾国は、君民一体、古今一貫、未だ曾て異国の侵略征服を受けず、未だ曾て国家的生命の中絶を見ずして今日に至れることが、取りも直さず日本精神を偉大ならしめた最後の原因であります。この生命の一貫不断あるが故に、旧を失ふことなくして新を抱擁し得るのであります。日本的生命が中断せざる故に、一たび吾国に摂取せられる思想文明は、日本的生命と共に永遠に生きて行くのであります。

第六　興国運動の原理

一　世界戦の意義

世界戦至高の意義が、革命欧羅巴と復興亜細亜とを、五年に亘る乱離と苦悩の間から生み落とすに在つたことは、吾等の堅く信じて疑はざる所であります。革命欧羅巴は、其の最後に落着くところが如何なる相を取るにもせよ、先づ資本主義に対する社会主義の抗争、換言すれば階級争闘に於ける労働階級の擡頭として、最初の第一歩を踏み出だせることは、極めて当然の論理であります。復興亜細亜は、欧羅巴の奴隷たる亜細亜民族の独立、並に欧羅巴厭抑の下に在る亜細亜諸国の真個の自由、換言すれば民族争闘に於ける非白人の昂潮として現はるべきことも、また必然の行程であり、現に爾かく進みつゝあるのであります。

この意味に於て世界戦は、明白に来るべき世界革命の序幕であつた。来るべき世界革命は、其の本質に於て、また其の範囲に於て、人間の未だ曾て知らざりし、深刻にして広汎なるものであります。そは先づ欧羅巴其者の革命であります。何となれば欧羅巴現在の共同生活が、其の組織の根柢に於て否定せられ、新しき原則の上に新しき社会秩序が樹立されやうとするが故であります。そは更に文字が示す如く、世界全体の革命であります。何となれば欧羅巴の利益――一層精確には欧羅巴の物質的利益を根本の動機として組織されたる現在の世界が、同じく根柢より改められて、人類全体の向上登高を原理とする新しき国際関係が、これによつて出現しやうとするが故であります。

此の雄渾森厳なる世界の過渡の時代に於て、最も勇敢なる人類の戦士として、吾等の前に其の偉大なる姿を現はし

無限の教訓を垂れつゝある幾多の英雄のうち、最も吾等の心を惹く者は取りも直さず露西亜・土耳古・印度に於ける三人の大丈夫―レニンとガンヂイと而してケマルとであります。

レニン

単に之を表面に就てのみ見ましても、三人の志業は真に驚嘆に値します。最初に現はれて最初に世を逝れるはレニンでありますが、彼れの金剛の努力は殆んど人間業とも思はれぬほどのものであつた。不断に内外両面の敵と戦ひ、極度の飢寒に苦しめられ、屢々没落の危機に瀕しつゝ、能く一切の難局を透貫し、困難其者の裡より常に新しき力を得来り、混沌其者の間より強大なる政治的並に軍事的機関を組織して、終に新しき社会秩序の基礎を築き上げたレニンの勇猛精神は実に人間の力の奇蹟であります。

彼によつて代表せらるゝ露国革命の価値は、其の社会的価値に存するに非ず、また現在の労農政府の存続如何に存するのでもありません。吾等に取りて最も重大なる教訓は、レニンの号令の下に一個偉大なる国民が、徹底して過去の制度を顛覆し、全力を挙げつゝあるといふ事実其ものであり、而して此の事実の根柢に潜む確信と勇気とであります。古へより今に至るまで、真に人類の向上を激成せるものは、唯だ是くの如き確信と勇気とであつた。

近世科学によつて鍛えられたる欧羅巴精神の権化たる点に於て、大いに学ぶべき所ある。希臘思想と基督教とに養はれ、更に仏蘭西革命の期するところの自由、其希ふところの平等、其の抱くところの友愛を、最も美事に実現すべき共同生活の組織制度の発見並に確立のために、高貴なる努力を続けて来たのであります。そは民主々義の精神に則り、所謂政治的自由と法律的平等との制

度を確立して、人類の向上を図らんとしたのであります。仏蘭西革命が、世界史に偉大なる貢献ありしは、更めて設くまでもない。而も其後百年ならずして、吾等の現に見るが如き社会的平等、経済的掠奪組織の革命によつて共同生活の福祉を実現せんとする社会主義の唱導となり、茲に理性と科学との力を恃み、経ニンは、其の徹底せる実行を敢てしたのであります。故にレ傾倒したのであります。

吾等の真に知らねばならぬことは、社会主義其ものの努力の中に抱有せらるゝ欧羅巴精神の意義、並に彼の努力によつて指示されて居る歴史の方向であります。

三　ガンディイ

レニンを去つてガンディに参ずれば、同じく人類の戦士であり乍ら、実に白雲万里の感なき得ませぬ。而してレニンとガンディとの相違は、欧羅巴精神と亜細亜魂との相違に他ならぬことが、限りなく吾等の心を惹きます。ガンディの志す所は、印度の解放である。而も此れの論理は、彼れの夫れと全く根柢を異にして居ります。ガンディ渾身の努力は、印度に於ける英国統治の掃蕩に在る。而も此れの戦術は、彼れの夫れと截然として似もつかぬものであります。

ガンディは国家の組織、社会の制度に就て更に言及する所なく、彼れの説く所は、印度人の魂の解放であります。其の期する所は、印度人をして真理に即する正善の生活を実現せしむるに在ります。英国の印度統治は、印度人を奴隷とするが故に、即ち印度人の人格を否定し、其の道徳的独立

を奪ふが故に、印度に於ける万悪の源である英国統治が印度人に如何なる物質的幸福を与ふるにもせよ、印度人の人格を蹂躙し根本に於て之れを物として取扱ふ時に其れが果して何を意味するか。是くの如き幸福に満足するものは、美衣と美食とを与へられて喜悦する娼婦の徒である。故に此の万悪の源は断乎として除去せねばならぬといふのが、実にガンデイの主張であります。

而もガンデイに従へば、此の邪悪と戦ふに、決して暴力を以てすべきでない。レニンが一切の権謀術数を辞せず、流血殺戮を辞せざる時、ガンデイは即ち悪を英国と共にせざることより戦ひを始めよと説く。之が為に彼は、主力を尽して真個の人間としての自覚を印度人の魂に喚起し、之によつて彼等の現状の忍ぶ可からざる所以を悟得せしめ、而して之れを脱出せんとの精神的勇気を振作せしめんとするものであります。曾て英国皇太子が、印度を巡遊せる時同志の或ものは之に暴力を加へんことを主張した。ガンデイは敢然として之を斥け、諸公にして其の決意を翻さゞる間、予は食を絶たんと宣言して、断食三日に及び、遂に同志をして陰謀を放棄せしむるに至つたこともあつた。彼れの制止なくんば、英国皇太子一度び印度を離るゝや此の恩人を捕へて牢獄に投じた。而もガンデイは怨む所なく憎む所ないのであります。

真理把持を主義とし、暴力によらざる非協同を原則とするガンデイの運動が、如何に印度人の魂を深く且汎く支配するに至りしかは、此処に説くを須ゐぬであらう。印度の如き政治的事情の下に箇程まで広汎なる国民運動の発展がガンデイによつて遂げられたと云ふことはレニンの場合と同じく、一個の奇蹟として驚異するに足るのであります。

レニンとガンデイが最も甚しき対立をなし乍ら、而して最も異なれる方法によつて戦ひ乍ら、等しく非常なる大業を成就しつゝあることは、表面極めて不可思議に見ゆるに拘らず、更に奥深く辿り往けば寧ろ正当なる理由の存するを了得するに難くありませぬ。ガンデイの運動が、火の原を焼く如くなる所以は、其の掲げる所の理想が、適確に印

度的であり、其の執る所の戦術が、徹底して印度的なるが故である。一切の腐敗と堕落とに拘らず、吠陀讃頌に最初の魂の声を表現して以来、印度の求め来れる所は、実に深奥幽玄なる精神的原理の体得であります。精神の高根の絶巓を窮むることに比ぶれば、塵の世の総べては第二義のものとせられ、之に執着することは厭ふべき煩悩として斥けられて来た。独り印度のみならず亜細亜全体が、多かれ少なかれ此の基調の上に立つて居ります。亜細亜に純乎たる科学的研究の起らざりし所以は、社会制度の周到緻密なる研究の起らざりし所以は、其の最後の原因を比処に求めねばなりませぬ。

故にガンヂイ以前、西欧の革命主義に則り、西欧の革命運動に倣つて起てる幾多印度志士の努力は、西欧教育を受け、西欧精神を呼吸せる青年を感激せしむるに足りたが、遂に排英運動を真個に国民的たらしめることが出来なかつたのであります。ガンヂイ出でゝ、精神的指導者として起つに及び、国民は翕然として彼れの指導を仰ぎ、精神運動が国民的に政治的革命運動たるに至つたのであります。それ故にガンヂイの目的は、印度が露西亜に非ざる限り、レニンと同一戦術によつて遂げらるべくもありませぬ。従つて其のレニンと全く趣を異にせる所以が、即ちガンヂイの勝利の原因であります。

四　ケマル・パシャ

印度を去つて土耳古を望めば、ムスタファ・ケマルが、秋霜の剣を提げて三軍に号令して居る。彼れの面目は、レニンの如くならず、またガンヂイの如くでない。ケマルとは、土耳古語に『真直』を意味し、彼が年少サロニカの陸軍幼年学校に学べる頃、彼を愛撫せる数学の教師ムスタファが、純一卒直なる彼れと同名の学生の為人を愛でゝ、選んで与へた名前であります。二十二歳にして士官学校を出で、陸軍少尉として軍隊に入つてから、四十七歳の今日ま

で、彼は其の名の如く真直に軍人として終始一貫した。明石将軍の如き、彼が必ず大事を成すべきを予言して居たとのことであります。ガンデイは、戦健闘によつて、其の崇高なる人格が世に知られていた。スン君は、ガンデイの名が未だ曾て日本人の口に上らざりし頃、既に印度に救世主たるべき者として、絶大なる期待を彼に属していました。私自身もビアスン君の口から初めて彼の名を聞いたのであります。ケマより彼が軍人としての才能は認められて居た。殊に世界戦に当り、第十師団長として、ダーダネルスの戦に英軍を撃退して偉勲を現はしてから、彼れの軍事的天才は土耳古全国に認められたけれど、而も此時でさへ、土耳古の存亡回教徒の政治的興廃が、彼れの双肩に荷はせられて居たことは、恐らく何人も想到せざりし所であつた。彼れの使命が、露堂々と現はれたのは、土耳古が衰頽のドン底に陥つた時、青年土耳古党の三首領タラート、エンヴエル、及ジエマールが、敗軍の将相として没落せる時であつたのである。

聯合軍と土耳古との間に休戦が成立した時、ケマルはパレステイナの戦線にアレンビー将軍と戦つて居たが、休戦の電報に接して君府に帰り、聯合軍の横暴を目撃し、且君府に止まりて策の施こすべきなきを知り、アナトリアに赴きて事を挙げ、土耳古国民主義の最後の戦士として、勝利に誇る全聯合国に堂々と挑戦しました。此時に於てケマルの旗下に集れるものは、彼れの人格と才幹とに傾倒し、且彼在るによつて土耳古復興の可能なるを信じたる若干の同志に過ぎず、世界は唯だ其無謀を笑ひ、或は唯だ其の志を憐んだのであります。ケマルの宣言は、簡潔明瞭である。曰く『吾等は敵に強ひられたるが故に戦ふ。何となれば吾等の敵は吾等自身の国土に於て、吾等を奴隷たらしめんとするが故である。吾等は、自身の国土に於て、独立を要望する。こは一切の国民に賦与せられたる権利、一国が他国に拒むことを許さぬ権利である』と。かくて数年の後、遂に能く土耳古復興の基礎を築くを得た。彼なくば土耳古は

明かに世界地図より抹殺せらるべき運命に在つたのであります。

さて土耳古に於て、偉大なる軍人及之に率ゐらるゝ軍隊が、国民的権利並に自由の戦士として、国民運動の中心となりしことは極めて当然の論理であります。サア・ウイリアム・グレゴリは、曾て埃及に及けるアラビ・パシヤの運動を論ずるに当り、下のやうに申して居ります。曰く『東方諸国に於て、政治運動の主体は、常に軍人である。彼等のみが能く其の目的を遂行すべき統一と勇気とを有する。其他の人民は、殆ど不平さへも洩らし得ずに、毛を剪られ肉にせらるゝ羊の如くである』と。波斯・埃及・土耳古の如き国家に於て、グレゴリの言は適確に肯綮に当つて居ります。殊に土耳古の場合に於ては、一九〇八年の革命も、今度の勝利も、共に軍人並に軍隊によつて行はれた。かくて土耳古の救済者が、労働階級の戦士に非ず、精神運動の指導者に非ず、軍人の間に出でたことは天意真に測るべからざるものあるを想はしめるのであります。

五　日本に起るべき運動

吾等は世界史の新しき頁を書きつゝある三人が、截然として独自一己の途を歩みつゝある事実の意味を明瞭に把握しなければなりませぬ。此等の三人のみと言はず、伊太利のムツソリニ、波斯のレザ汗、亜富汗斯担のアマヌラー王の如き、苟くも当世に於て興国の大業に拮据し、多かれ少なかれ其功を挙げつゝある者は、一として皆な然らざるは無い。蓋し一切の国家は国民的精神の創造であり、同時に其の精神を保持し長養する絶対の組織体であります。そは民族の性情と独特の歴史とを経緯とする独一無二の国家的個性を有するが故に、其の進むべき路も亦自ら異ならざるを得ませぬ。従つて一切の興国運動は、決して他国の模倣するを許さない。そは夫々の国民精神の真個の体得者によつて、其国独自の理想と方法とによつて行はるべきものなること、現に幾多の英雄が吾等の目前に之を立証しつゝあ

る通りであります。

かくて一切の国民運動の成敗を卜すべき最後の準則は、実に其の運動が国民的なるや否やに存します。孰れの国民運動の成功を贏ち得るとしても、若し夫れが模倣的であり、輸入的であり、直訳的であるならば仮令一時の成功を贏ち得るとしても、断じて有終の美をなし難い。之に反して若し其の運動が、深く国民本来の精神に根ざし、運動の各部門に於て、躍如たる国民性の発露を認め得るならば、其の壮心烈志は晩かれ早かれ実現されるのであります。

然るに従来亜細亜諸国の復興運動又は革命運動に於ける共通の妄見は、実に亜細亜を近代化又は西欧化することに甚しきに至つては、是くすることが興国の唯一路なるかによつて、亜細亜を隆興せしめ得べしと考へることであつた。而して是くの如き運動は、固より全然無意義ではなかつたが、終に失敗に帰せざるを得なかつたのであります。興国とは、如何なる例外もなく其国に内存する昔ながらの生命が、機運熟して新しき力を帯びて捲土重来することであります。そは各国自身の『本然（ダルマ）』の復興たるべくして、断じて他の『本然（ダルマ）』の追従たるを許されない。日蓮既に説破すらく『法は必ず国を鑒みて弘む可し。彼の国に好かりし法なれば、此の国にも好かるべしとは思ふ可からず』と。宗教尚且然り、社会制度・国家組織の如き、尚更のことなるは言ふ迄もありませぬ。

いまの日本には、レニンに倣ふことを極悪と罵り乍ら、或はムソリニに倣はんとするガンディに倣はんとする改造論者が居ります。而も模倣の非なる点に於て、其間に何の径庭もあるべき筈がない。若し夫れ他山の石としてならば、三者等しく以て吾を磨くに役立つであらう。現にレニンの努力の中に含まるゝ欧羅巴精神は、吾等の学ばねばならぬものゝ一つである。其の精神とは、実に組織の精神であります。組織若しくは外面的制度を過重することは、

幾多批難すべき点あるに拘らず、亜細亜諸国の必ず学ばねばならぬ点であります。政治的理想の闡明に於て、亜細亜は断じて欧羅巴の後に落ちない。而も之を実現すべき方法の具体的研究に於て甚だしく貧弱であります。例へガンデイの場合に於ても、善き魂は自然に善き制度を生むと嘯いて居ります。さり乍ら吾等は必ずや思を国家の制度に潜め、吾等の理想を実現するに最も適切なる組織を創造せねばなりませぬ。而して其の組織が輸入社会主義たるを許さぬことは無論であります。

ガンデイに学ぶ可きところは、彼が印度に於ける万悪の源として英国統治を指摘し、弾劾したる如く、日本の現実生活に於て、根源となりつゝあるものを、ガンデイの如く畏るゝ所なく爬羅抉剔し、同時に求むべき具体的正義を明示することであります。若し然らずば竟に在来の陳套なる談義説法の外に出でぬであらう。善為すべし、悪為すべからずと云ふが如き抽象的道徳を、如何に高声に唱へたところで、日本の改造は期待せらるべくもないのであります。

吾等は、日本改造の秋が、次第に迫りつゝあるを思ひます。而して此の大業は、レニンに倣はず、ケマルの跡を踏まず、日本精神の真個の体現者によつて、日本的に断行せらるべきを信じます。そは一人であるかも知れぬ。また一団であるかも知らぬ。吾等は、是くの如き者の既に儼存して、天の召喚を待ちつゝあるを信じます。それは今日に於て、夜の盗人の如く隠れて名もなきものであるかも知れませぬ。而も機運熟しなば、電光の如く現はれて、其の使命を果たすであらうと思ひます。

第七　復興せらるべきものは何ぞ

一　『敏感なる国土』

あらゆる意味に於て思ひ出多き此の震災記念日に当り、諸君と共に深刻厳粛に反省し、且つ反省し得たるところを諸君の前に披瀝する機会を与へられたことは、私の最も光栄に存ずるところであります。私のルと言ふフランスの哲学者が居ります。大正四年から八年まで日本に滞在して、其間に『告日本国』といふ一篇を公けにし、日本には七つの栄誉があり、之に伴つて七つの大業あることを述べ、世界に対する吾国の雄大森厳なる使命を説いて居りますが、其中にリシヤル君は『大地は高遠なる希望を汝に属す。大地が汝の脚下に震撼する時、大地が汝に向つて語らんとするところを覚れ、大地をして失望せしむる勿れ』と申して居ります。また他の箇処では『汝は多幸なる嶋嶼を城砦として其裡に建設せられたり。恰も是れ、繞らすに波浪の墻壁を以てし、海岸を以て警護とせる安全なる揺籃裡に長養せるに譬ふ可し。されど敏感なる国土に揺られたるが故に、不覚の甘睡に堕することなかりき』とも申して居ります。リシヤル君が、大地震撼すると云ひ、敏感なる国土に揺られると申したのは、取りも直さず地震のことであります。吾がリシヤル君の信念によれば、吾国に於て古来頻々として起る大小の地震は、日本国民を其の惰眠から喚び醒まし、厳かに反省させようとする天意だといふのであります。

然るにシリヤル君が日本を去つて僅かに四年、吾等は非常なる地震に見舞はれたのであります。この地震は、単に地震としては吾国未曾有のものでないかも知れませぬが、地震後に起つた火災のために生じた災害の甚大なりしこと

は、恐らく日本に於て空前なりしのみならず、世界に於ても此類少なき慘事であつたと存じます。即ち東京市だけにも、焼失家屋四十余万戸、罹災者百十四万、悲慘なる死を遂げた者が七万を超え、焼失面積は一千万坪以上に達し、東京の大半が焼野原に変り果てたのであります。而も是程の大変災であり乍ら、吾等はその起る一時間前、否一瞬間前にも之を予知することが出来ず、徹頭徹尾無用意の間に突如として襲ひかゝられ、たつた今まで華美と繁栄とを誇つて居た町が見る〳〵焦土と化し、平和と幸福とを楽しんでいた人々が忽ち地獄の苦難に投げ入れられたのを目の当り見たのであります。これが天意であるか否かは人々によつて異見がありましようが、単なる一個の自然現象として見まするだけでも、吾々をして再思三省せしめねば止まぬ非常の出来事に相違ないのであります。

初め此の地震の報道が世界に伝へられました時に、外国では日本が此為に再び起つべからざる程の深甚なる打撃を受けたものと考へ、日本の前途に対していろ〳〵悲観的な批判を加へ、恐らく内心では喜悦を感じながら、表面では日本の不幸を悲しんだのであります。アメリカの或る新聞の如きは太平洋の彼岸にある吾等の恐るべき競争者も、今度の地震によつて最早恐るゝに足らぬものとなつた、今日以後太平洋は初めて其名の故く太平となるであらうとさへ論じたのであります。幸にして日本国民の潑剌たる活力は、幾多の困難と戦ひつゝ着々復興の歩を進め、東京の町々は震災以前よりも立派な街路、立派な建築を以て其の面目を日毎に新たにして居ります。固より部分々々に就て申せば遺憾の点も多い。第一復興計画そのものが周囲の容喙によつて理想的に樹てられず、極めて不徹底なものとなつてしまつた。その不徹底な計画を実行するに当つて、小さい利害の衝突から復興局と東京市との間に争があつたり、順序正しく工事を進めることが出来ずに、折角出来たと思つた道路が幾度も掘返へされたり、架けても渡れない橋があつたりする上に、復興事業に絡まる不届至極なる疑獄が起つたりして、実は昭和三年即ち本年度に計画の完成を告ぐべき筈であつたのが、御覧の通り延期を余儀なくされて居るのであります。それにしても諸外国があれほど見縊つて

居たに拘らず、只今までに区劃整理は八割、道路は五割四分まで進行し、全工程の七割強まで漕付けたことは、諸君と共に慶賀してよいと思ひます。此間のいろいろの経緯などを考へますと、吾々は目に見えざる何者かに導かれて、喧嘩をしたり怠けたりして居り乍ら、行くところまではぐんぐんと引張られて行くやうな気が致します。この見えざる偉大なる力、部分々々を見れば人間の小さい利害、小さい争闘、小さい意地で混沌紛糾を極めて居る東京を、全体から見ればいつの間にやら復興させて行く此の偉大なる力は、吾々をして敬虔の念を抱かしめねば止まぬものがあります。私は此の偉大なる力を認めまするが故に、復興の必ず完成すべきを信じて諸君と共に慶賀するのであります。

たゞ私は此の機会に於て、破壊並に復興といふことに就いて、一層立入つて考へて見たいと思ひます、道路や建物を再興するだけで吾々は満足してよいか、若しそれだけ満足出来ぬとすれば、本当に復興せらるべきものは何か。私は之に就て諸君と共に反省したい。

二　震災後の『文化日本』

震災直後あの困難のどん底に於て、東京市民の挙げた勇ましい声は、復旧に非ず復興だといふ意気込で、粗末な衣服を着け、簡単な食物を取り、死物狂ひで努力しようと覚悟だけはしたのであります。それ故にあの地震は神罰であると恐懼した人々があつたと同時に、之を以て天祐であると喜んだ人々もあつたのであります。それは此の地震によつて、世界大戦以来日本の上下に漲つて居た成金気分が、根底から叩き壊されたと考へたからであります。実は成金時代が過ぎ去つて居たに拘らず、成金気分だけは依然として残つて居た。その成金気分の堕落し去つて、実は成金時代が過ぎ去つて居たに拘らず、成金気分だけは依然として残つて居た。その成金気分の宿酔が、大地震によつて醒まされるだらうと信じたのであります。

私は地震によつて成金気分が一掃されたことは事実であると信じます。国民の精神が緊張したことも事実です。さり乍ら不幸にして其の緊張は永続しなかつた。永続させるためには政府当局を初め、日本の上流階級が余程の努力を必要としたのでありますが、上に在る者ほど早く精神の緊張を失ひ、心に油断を生じましたので、国民も自然と気が弛んだのであります。私は屢々吾国の指導階級から、国民の緩怠を責める声を聴きますが、私は『諸君は如何』と反問したいのであります。若し『吾は当時の緊張を失はず』と言下に答へ得る人ならば、其人は国民を責める資格があります。自分はさつさと暢気な昔に立帰つて国民だけを鞭撻しやうと思つても、これは無駄なことであります。上が緩んで来るから倘更下も緩む。従つて仮令成金気分は地震と共に無くなつたとしても、之に代つて一向面白くない気分が社会に漲つて来るのであります。

然らば其の気分は如何なるものかと申せば、適当な言葉を考へ付きませんから仮に文化気分と名づけて置きます。此の気分が具体的に現れたのが、取りも直さず地震後に流行し始めた所謂『文化的生活』であります。文化草履、下つては文化丼などもありますが、其等の総てに共通なる性質は、表面だけをつくろつて内実はつまらぬといふことであります。従つて、『文化』と名のつくものは一つもない。一時凌ぎのもので堂々たるものは一つもない。一時凌ぎの魔化しものだけであります。而もそれが概ね最も浅薄な西洋模倣に過ぎないので一層驚き入る。西洋を模倣して一時を間に合せる気分が、地震以後の日本を支配するに至つたとすれば、それは決して喜ぶべきことではない。旧き東京は従つて東京によつて代表される旧き日本が終局を告げて、新しき東京、新しき日本が是れから興るのだといふ思想が震災直後の人々に宿つたのでありますが、若しも現に見るが如き『文化的』日本が、期待されたる、新日本であるならば、あの地震は天祐どころか、実に二重の災厄を吾国に与へたものであります。復興せらるべきものは断じて斯様なものであつてはなりませぬ。

地震の有無に拘らず、吾等は日本を改造せねばならぬ破目になつて居るのであります。唯覚悟を強めさせただけであります。地震が吾々に破壊して見せたものは何か、思ひ切つて灰燼に帰せしめたものは何か。他なし欧米的東京、即ち欧米的日本であります。欧米文明の過度の崇拝によつて、本来の面目を蔽はれて居る日本の外面を打倒し去つたのが彼の地震である。之に包まれた内容を掃蕩して、新しき日本にあらず真個の日本を復興するのが、国民総体の仕事でなければならない。然るに真個の日本の代りに、以前よりも劣る浅薄な欧米的日本が現出したとするならば、吾々は明白に誤れる道を歩んで居るのであります。従つて正しき道に復らなければならぬことは勿論であります。

三　欧米模倣の最期

先刻三土大蔵大臣から、段々と財政経済上の施設に関する政府の苦心のほどを拝聴し、其の辛労に対しては諸君と共に感謝を捧げたいと存じます。而も政府の苦心努力に拘らず、最も厳粛なる事実は国民の多数が年一年と貧乏になつて行くこと、国民生活が非常な勢で行詰つて行くことであります。これには無論地震による経済的打撃も加はつて居りますが、由来するところは遥に遠いことゝ信じます。いま其の遠近大小の原因を事細かに申上げる余裕は持つて居りませぬが、最後の原因は明治以来欧米の制度文物を取入れて、日本を欧米化するために、悉く之を日本に移さうとした。先程も大蔵大臣から金融の話がありましたが、その金融制度にしても、日本に於てのみ骨折つて来たことである。日本の習慣や民情を仔細に考慮することなく、西洋のものを善さそうに見えたものは一顧眄だも与へず、専ら西洋の独特の発達を遂げ、長年の歴史を有する頼母子講や無尽などといふ庶民金融機関には利用の途なきも銀行制度を採用して来た。その結果は何うかと申せば、今日の銀行は富豪のためには都合よいけれど、中流以下の国民には

のとなつて居ります。それが次第に甚しくなつて、今や上の方には金が有り余り、下の方には無一文という変調を来たして居るのであります。借りなくとも済む人には銀行の方から何卒借りてくれと頼むし、借りなければ仕事が立つて行かぬ人には融通の途がない。これでは貧富の懸隔が急速に大きくなつて行く外ないと存じます。

ひとり金融制度のみならず、一般経済組織そのものから、政治や教育の制度まで悉く西洋に倣つて変へてしまつた。国初以来重農主義・農村本位であつた日本を、急速に商工主義・都市本位の国家とし、西洋風の資本主義を経済生活の基調としたのでありますから、資本主義経済に伴ふ幾多の悲惨や弊害が、西洋に於けると同じく、又はそれ以上に日本にも発生することは自然の経路であります。教育も同様で、是亦全然西洋の模倣である以上、モダンボーイやモダンガールが出来たと云つて憤るのは、自分の影法師を罵るやうなものであります。現に文部省などで新しい計画を樹てる場合には、いろいろの議論が戦はされるそうでありますが、可否の決定は欧米諸国に範例があるか否かによるとのことであります。英国や米国や独逸でも同様のことを行つて居ますと言へば、然らば可からうといふことになる。まことに不思議な次第と申さねばなりませぬ。

斯様な事情が重なり合つて所謂社会問題が起つて来たのでありますが、昨今では各府県に社会課なるものが設けられ、社会政策的な仕事をして居ります。ところが其の仕事がまた甚だ要領を得ないものであります。例へば私が地方旅行中の実見でありますが、或県では県民に勤倹を奨励する為に気の利いた標語や文章を印刷したビラを作り、県庁の役人が自動車に乗つて其ビラを、汗水流して田の中で働いて居る百姓の上に撒いて居たのであります。これでは撒く方と撒かれる方とが顛倒して居る。従つて勤倹の奨励とはならず、却つて反抗心を挑発するに終ります。また東京では時々蝿取デーなるものをやる。今日殺しても明日はまた繁殖するのに、少なからぬ金と人手を使つて之を宣伝す

るなどは気が知れない。自分で考へたのでは斯様な馬鹿々々しい工夫が出る筈がないからこれを西洋でやるから行るが可いと云ふ筆法だらうと思ひます。同様にアメリカ辺りで流行する宣伝方法、安全デーだの何々デーだのと、根本的方面を考へずに目先の派手やかな仕事をやる傾向が盛んであります。やる方では一生懸命であり、また決して悪い事ではありませんが、国民の方では一向有り難いと思つて居りませぬ。少くも本当に自分等の為にやつて呉れて居る仕事とは感じて居りませぬ。それは西洋人の着物を持つて来て、日本人に着せるのであるから、ピタリと合はないのが当然であります。方面委員などいふものも同様で、人の世話をすることは善いとしても、世話される方では何とも思つて居ない。年末に餅を配布しても之を受取る方では当前のことゝ思ふか、もつと無遠慮なのは何だ是つぱかり、といふ調子で人情恩顧を感ずる点では世界無比の日本人が一向に感謝の念を抱かないのであります。其上に此の方面委員なるものが政党に利用される危険あることは諸君が御承知の通りであります。或は弊害の方が大になりはせぬかと心配されるのだ疑問であり、或は弊害の方が大になりはせぬかと心配されるのであります。

かく観察して参りますると、政府を初めとし、役所といふ役所が皆な相応に骨折つて居るに拘らず、日本の社会は健全にもならず幸福にもならず、却つて年々歳々不健全となり不幸となつて行くことが判ります。これは真剣に考へなければならぬ問題であります。

四　真に復興せらるべきもの

一から十まで西洋流に考へ且行つたことが、現に見る通り面白くない結果を招いて居るとすれば従来の行方を改める外に途はないのであります。日本は約六十年間西洋を過度に崇拝し、西洋のものは総て善しといふ思想に支配されて来ましたから、自分ではそうと意識せず

して言行が自然と西洋風になつて居ります。

従つて之を脱却することは非常に困難で、実にあの大地震が揮へる如き大威力を必要としまして破壊し去れる後に復興せるべきものは、したのは、此の西洋的日本の外部であり、吾等が次で破壊し去れる後に復興せるべきものは、的日本に非ずして純乎として純なる日本でなければなりませぬ。

欧米崇拝の最も恐るべき点は、国民をして日本的自覚・日本的理想を失はしめることであります。吾国の上流階級に行くほど甚しいのでありますから、それだけ日本的自覚を欠如し、それだけ日本的理想を失はしめることであります。居りません。内治と言はず外交と言はず、今日の吾国の政治には不満に堪えぬ点だらけでありますが、因は今日の政治家に雄渾荘厳なる日本的理想が把持されていないからであります。ロシアは世界から悪魔の如く罵られて居りますが、ロシアの指導階級には燃ゆるが如き理想がある。その理想を振り翳して世界を征服しやうとする意気込は敵なが ら天晴れと申さねばなりませぬ。彼等は其の奉ずる主義理想を最善のものと信じて、之を世界に強制せんとして居るのでありますから、其の対外政策は常に積極的であります。然るに今日の吾国の渾なる理想がない。一切の邪悪なる思想と戦ひ、善を真実の幸福に導くべき日本的理想が故に、ロシアを罵り乍らも常に日本と言はず、世界を向上せしめ、人類もつと之に対して攻勢となり、積極的となるべき筈であります。彼に優るものが儼然として吾に在るならば、

此の民族的自尊の点では、実に支那にさへも劣つて居る。文明とは中華民族のみが有するものゝ如く心得て、外国人をば昔第一の中国人は叩かれても擲られても、ひであります。それであるのに昨今の日本人は、民族的自尊を失つてしまつた。日本的精神からいふ自信は、少くとも第一等たり得る精神であるといふ自信は、日本の指導階級の魂から失せ果てたのであります

す。それ故に日本国家の威厳が日に〳〵衰へて行く。従つて対支外交なども顔に泥を塗られた場合は、まあ〳〵洗へば落ちる位ゐで辛抱するが、財布から銀貨一枚盗まれた場合は、血眼によつて腕をまくるやうな行方であります。

私は日本現在の政治家を以て、識見や才幹が足らぬとは決して思ひません。それだのに年と共に内外多難になつて、四方八方行詰りになつたのは、最も肝心なものが一つ欠けて居るからだと存じます。その肝心なものとは誠であります。而して誠が足らないのは、日本的理想を把握して居ないからであります。若し日本の世界に対する使命を切実に自覚して居るならば、もつと身に泌みて国民生活のことを考へ、もつと堂々と外国と交際しなければならぬ筈であります。満洲に対する外交などでも、今日吾国が満蒙に発展の基礎を確立することが、独り君国のためと言はず、亜細亜のために惹いて世界のために最善の事柄であると信ずるならば、只今のやうな見苦しい態度は取れぬ筈だ。これで善事であるとの自信がなく、悪事でもあるかの如く考へて居るから、列強の顔色ばかり窺つて居る始末であります。私は決して列強を無視しろとは申しませぬ。真心を以て彼等を説得するだけの努力は最も必要であります。然るに顔色は窺ふけれど、此の当然の努力さへ払はうとせず、現に英米両国の大使の如き前者は半年も東京で悠々として居るし、後者は大事の時機に帰朝させて居る。要するに誠がないから万事が真剣でないのであります。若し政府が総選挙に臨む時のやうな真剣味を以て外交に当るならば、対支問題の解決は決して困難でないが、今のやう時々思ひ出して力瘤を入れるぐらいでは、到底仕事は覚束ないと存じます。

内治に就いても同様で、国民生活を身に泌みて考へるならば、西洋の真似事で御茶を濁すやうな社会施設などに無駄骨を折ることなく、もつと適切有効な方策を実行すべき筈であります。非常なる使命を帯びて居る日本民族である、その民族の生活に就て厳粛に心配するやうになる筈であります。自分等の政権争奪には真剣に

なり死物狂ひになつて、有りつたけの知慧と腕と腹を働かすが、其外の事には一向本気にならないのでは、国民が国家のことに一生懸命にならぬのは自然の勢ひであります。

政治家を初め、日本の指導階級は、昨今頻りに国民思想の悪化を説き、腐敗堕落を責めて居りますが、私は頓と左様な意見に賛成出来ませぬ。思想は生活の影でありますから、生活の不安に伴ふて不健全な思想も生れますが、併し大多数の国民はいつの世でもこんなものであります。否な私は国民は全体として進歩向上の途を歩いて居ると思ひます。少くとも今日と徳川末期とを比較して、今日の市民や農民が、当時の『素町人』や『土百姓』に劣つて居るとは思はない。今日以上であつた。そのやうな『素町人』や『土百姓』でも、徳川幕府の国民を善導し鼓舞するならば、必ず国運の興隆すべきを信じて疑ひませぬ。江戸末期の頽廃淫蕩の気風は恐らく遥かに今日の意気を以て之を率ゐて起てば、半世紀ならずして隆々たる国威を発揮するを得たのであります。況んや今日に於て、若し日本的理想を堅確に把握せる人々が現在の指導階級に代つて、此口先や筆先で善導する前に、先づ自ら改め、自ら責めねばならぬと存じます。

かくて真に復興せらるべきものは『日本』であります。日本的精神・日本的理想であります。吾等はモボやモガの散歩を快くするために銀座通りを復興したのではない。市民の膏血を絞りて私腹を肥やす議員の乱舞場たらしめるために市会議事堂を建てたのではない。切に正しくて強き『日本』を復興して、一世を支配する邪悪を打倒したいと存じます。これが今日私の諸君に申上げたい要点であります。

第八　軍人と政治家よりの教訓

一　武門政治の国家的寄与

頼朝以来七百年、吾国では武士が軍人と政治家とを一身に兼ねて来たのであります。いわゆる武門政治とは、全国に亘りて恒久的に戒厳令を布きながら、攻城野戦の精神を以て国民を治めたのであります。従つて其の官庁は即ち『城』であり、其の官吏は悉く『武家』であつたのであります。徳川時代に於ける町奉行、勘定奉行の如きも、今日の警察官などに比ぶべきものでなく、むしろ憲兵司令官や主計官に比ぶべきものであります。而して当時の武家は、各々その藩主に分属し、藩主のために生死すべき生命を有して、私の為に生死すべき生命を有たなかつたのであります。さればこそ徳川家康の好敵手として最後まで彼と戦へる石田三成は、常に『武士は君主より受ける物を残してはならぬ、これを残す者は盗人であり、使ひ過ごして借金する者は愚者である』と言つて居た。これは武士が原則として君主の倉庫を有して自家の倉庫を有すべからざることを力説したものであります。まことに武士の生活は、武士全体の生活と分つべからざる一体をなし、一藩の武士は、悉く其の利己放縦の『私』を棄てゝ、秩序峻厳の『公』に帰一し、かくして実現せられたる統一組織の力を以て、内は藩民を治め、外は他藩に備へたのである。

この統制ある共同生活が、日本民族に寄与したる精神的訓練の価値は、実に非常なるものであります。武士に愛藩の念が盛んであつたのは、彼等が『全体』を尚び『統一』を重んじたる精神を示せるものであります。それ故に他日

彼等が日本国の位置を知るに及んで、この精神を日本全国に拡充し、其藩を愛する心を生命を天皇に献げたものであります。若し吾国に藩なるものなく、藩の共同生活なく、恐らく公戦に勇にして愛国の情に濃かなる日本民族を見ることが出来なかつたらうと思はれます。

さて徳川幕府を倒した維新政治家は、政治の範を欧米に採り、欧米の制度に倣つて近代国家を組織することに努力したのであります。これは当然至極の行程で、もとより一点非難すべきところがありませぬ。たゞ当時の政治家が、仮令止むなき騎虎の勢ひなりしとは言へ、旧日本の政治的伝統に殆ど一顧眄だに与へず、旧幕の政治は徳川の政治なりとして、悉く之を打倒しやうとしたこと、並に欧米の組織制度を採用すれば、直ちに欧米に於けるものゝやうに考へたことは、之を今日より顧れば明白に失策であつたとは申さねばなりませぬ。

二　軍人と政治家との分化

明治維新と共に先づ軍人と政治家とが分化したのであります。これは固より当然のことであります。而して明治日本の軍人は、ヨーロッパの軍制を採用しながらも、単なる兵略戦術以外に日本の武人としての精神的鍛錬を重んじ、武士道の本領を護持するために非常なる苦心を払つて居ります。そは全力を挙げてヨーロッパの組織を取入れ、且つ其の科学を利用したのであります。ヨーロッパの最も著しき特徴は、実に組織と科学との二つに外ならぬのであります。而して此等の二つを学ぶことに於て、軍人の如く徹底果敢なりしものは他にありませぬ。それにも拘らず軍人はその精神に於て飽迄も日本の武士たることを心懸けたのであります。日本軍隊の武勇は、疑ひもなく此点に由来するのであります。今や軍人の間にも世間の指弾を受くる将軍を出だし、軍隊について幾多非難の声を聴くけれど、之を全体として見る時は、軍人並に軍隊は今日といえども吾国の如何なる他の階級よりも遥に堅実であります。

三　現代政治の堕落

然るに政治家の場合は軍人の如くでなかつた。政治家も武士の分身ではありましたが、明治維新以前に武士が必ず心懸けねばならなかつた為政者としての人格的鍛錬を放棄したのでもまた政治家に対して特別なる道徳的要求を有たなかつたのであります。従つて事務の才幹あり、法律制度に通じて居りさへすれば、誰でも政治家となり得るものゝやうに考へ、ついには『政治とは策略のことだ』とさへ信ぜられるやうになつたのであります。

いま仮に軍人が収賄又は贈賄の嫌疑を受け、または之によつて刑に処せられたとすれば、如何に名将の器であらうとも、其人は帝国の陸海軍から葬り去らなければなりませぬ。然るに政治家の場合は殆ど左様の心配がない。巧に悪銭を捲上げることが、却つて政治家の誉れある腕とされて居るのであります。さり乍ら斯様な政治家が政治の局に当つていては、国民は決して安堵し得るものでありませぬ。孟子が『君子なくんば以て治まるなし』と申したことは、少くも東洋に於ては千古不磨の政治的真理であります。日本国民は欧米人と違つて、外面的制度に従つて、器械的又は自治的に行動することに慣れて居りませぬ。言換へれば道徳と政治とを明確に分離させて居ないのであります。従つて法律制度を与へたからと言つて、自動的に立派な政治が行はれ、立派な国家が実現するやうなことは思ひも寄らぬ話であります。その利害得失は兎もあれ、ひとり日本と言はず東洋諸国に於ては、荀子が申したやうに『治人』ありて『治法』なしと言ふことが出来ます。治人ありて治法なしとは、政治上に於ても最も重んずべきものは政治家の人格であつて、決して法律や制度ではないといふ意味であります。そはヨーロッパに於けるさへ、高貴なる品性が政治家の重要を重んずる思想と鮮明なる樹立をなして居ります。然るに其のヨーロッパに於てさへ、『治人』よりも『治法』

なる資格とされて居るのに、日本では殆ど此事がないのであります。

四　政治家としての鍛錬

旧幕時代の武士は、必ず経史の学を修むべきものとなりました。経学は宇宙と人生との意義を教へる哲学であり、史学は治乱興亡の跡より帰納演釈したる政治学であります。昔の武士は是くの如き素養を以て政治の実際に当らうとしたのであります。然るに今日の吾国の政治家は、稀有の例外を除けば、想を形而上の学問に潜め、心を道念の長養に凝らすといふやうなことがありませぬ。当代第一流の政治家諸公、打見たるところ多くは会社の重役たるに適はしいけれど、君国の大臣たるの徳を具へて居りませぬ。而も今日の国家生活に於ける社会現象は、実は複雑多端を極めて居ります。此の複雑多岐なる現象に当面して、よく全体的判断を下し得る者でなければ、真個の政治家たる資格は断じてないのであります。これは精神的鍛錬を経たる者のみが能くするところであります。政治家は哲人でなければならぬとは、名高きプラトンの主張でありますが、プラトンを待つまでもなく、東洋思想は古来厳正に政治家に対して哲人の素養を要求して居るのであります。私は現代日本の政治的堕落に、いろいろの原因を認めまするがその最も根本的なるものとして、政治家が精神的鍛錬を無視したることを挙げたいのであります。

す。私は軍人と政治家とを比較して殊に此感を深くするものであります。

等しく欧米の制度を採用しながら、軍隊は世界に誇るべき精鋭無比のものとなり、政治は恥づべき腐敗堕落を極めて居る。両者の由つて岐るゝところ実に日本的自覚の有無強弱にあります。吾々の深く省みなければならぬことと存じます。